

名大トピックス

NAGOYA UNIVERSITY TOPICS

No.216

2011年5月

平成23年度入学式を挙げる



目次

●ニュース

平成23年度入学式を挙	3
平成22年度「赤崎賞」授賞式を挙	12
平成23年度科学技術分野の文部科学大臣表彰者が決まる	13
学術奨励賞授与式を挙	13
第32回経営協議会を開催	14
退職者表彰式及び退職職員懇談会を開催	14
研究マネジメントセミナー2011を開催	14
第6回高等研究院レクチャーを開催	15

●地域にひらく

名古屋大学の災害対策	16
------------	----

●知の先端

“時空のトンネル” ワームホールの検証法	20
阿部 文雄 (太陽地球環境研究所准教授)	

●教育のデザインとプラクティス

大学院生のための大学院共通外国語科目を開講	22
-----------------------	----

●知の未来へ

プラズマ材料相互作用の新展開	24
梶田 信 (エコトピア科学研究所講師)	

●部局ニュース

減災連携研究センター大震災追悼シンポジウムを開催	25
医学部動物慰霊祭を挙	26
環境医学研究所動物慰霊祭を挙	26
ICCAE 第5回オープンセミナーを開催	26
理学南館大講堂竣工式を挙	27
博物館特別企画「恐竜たちがやってきた」第3弾を開催	27
ミクロの探検隊を開催	28
ポタニカルアート作品展を開催	28

●名大基金にご寄附いただいた方々

	29
--	----

●新名誉教授のことば

	32
--	----

●名大を表敬訪問された方々

	35
--	----

●新たに締結した学術交流協定

	35
--	----

●構成員を対象とした研修

	35
--	----

●新任部局長等の紹介

	36
--	----

●資 料

● 本学関係の新聞記事掲載一覧 平成23年3月16日～4月15日	38
----------------------------------	----

● INFORMATION

第52回名大祭を6月2日(木)～5日(日)に開催	41
--------------------------	----

● イベントカレンダー

	45
--	----

● ちょっと名大史

映像資料にみる1960年代の名大② — 64年頃のカラー映像 —	46
----------------------------------	----

平成23年度入学式を挙





平成23年度名古屋大学入学式が、4月5日(火)、豊田講堂において、大学院は午前10時から、学部は午前11時15分から挙行されました。

今年度の入学生は、大学院2,278名(修士課程及び博士課程前期課程1,706名、大学院法学研究科専門職学位課程(法科大学院)84名、医学博士課程及び博士課程後期課程488名)及び学部2,293名の計4,571名です。

例年、名古屋大学交響楽団の演奏により式典が始まっていましたが、今回は、3月11日(金)に発生した東日本大震災での深刻な被災状況を考慮し、演奏や合唱等を取りやめ、簡素化して執り行いました。

まず、この震災において犠牲になられた方々に哀悼の意を表し、黙祷が捧げられました。その後、濱口総長から、

大学院入学生及び学部入学生それぞれに対し、祝辞が述べられました(詳しくは、総長の辞をご覧ください)。

続いて、各研究科長等の紹介があった後、大学院理学研究科博士課程前期課程入学生の田中康太郎さんと医学部入学生の仲本正之さんが、入学生総代として、入学にあたって学生としての本分を全うすることを宣誓しました。

また、名古屋大学全学同窓会副会長の柴田昌治氏(日本ガイシ株式会社取締役相談役)より心のこもった祝辞をいただき、(詳しくは、来賓祝辞をご覧ください)式典は終了しました。

式典終了後には、本学が主体となり東日本大震災の募金活動が行われ、善意の義援金149,072円が集まりました。

その後、学部入学生を対象として「生協ガイダンス」及び学生による「入

学祭典」と称したサークル紹介が行われました。様々なサークルによる趣向を凝らしたステージパフォーマンスに、会場は大いに盛り上がりました。

豊田講堂の前庭には、詰めかけた大勢の在学生に部活やサークルの勧誘を受けたり、家族などと記念撮影をしたりする入学生の姿が見られました。

入学式の様子は、豊田講堂内ホワイエ及び中2階、シンポジオンホール、経済学部カンファレンスホール、IB電子情報館大講義室、また、本学ホームページ上においてライブ中継され、多くの方が式典に臨みました。

なお、入学式の模様は、現在、本学のホームページ(<http://www.nagoya-u.ac.jp/about-nu/publication/movie/>)で視聴することができます。



平成23年度大学院入学式祝辞

名古屋大学総長 濱口 道成

皆さん。名古屋大学大学院へ入学おめでとうございます。
本日、総数2,278名の大学院入学生を迎えました。

研究を志し、大学院へ進まれた皆さんを、心から祝福し、歓迎します。

さて今日は本来ならば、皆さんの入学を、大学を挙げて祝うべき日ではありますが、まず始めに、申し上げる事があります。ご存じのように、3月11日、東北地方を中心に東日本大震災が起きました。被災され、現在も困難な状況にある方々に、心よりお見舞いを申し上げると共に、不幸にもお亡くなりになった方々のご冥福をお祈り申し上げます。

この震災により、多くの日本人が、そして皆さんと同世代の若者が、命を奪われました。3日現在警視庁のまとめでは、亡くなられた方12,009人、安否不明の方15,472人と報告されています。既に、3万人近い人々が行方不明となるか、亡くなられています。まだ全容が明らかではありません。

今この瞬間も、被災地では皆さんと同世代の若者が、家族を失い、家を失い、明日もどうなるかわからない厳しい生活を強いられています。

そして、今日の入学式も、このような未曾有の災害の中で行われる式であります。実際、関東地方を中心に多くの大学が入学式を中止し、授業開始の時期がまだ決まっていない大学も多数あると聞いております。さて、皆さんはどう思われますか。私たちはどうすべきなのかと。

名古屋大学においては、議論の結果、簡素に入学式を行うこととしました。

何故だと思われますか。

それは、いまこの日本が直面している未曾有の困難な時期にあたって、大学院に入学する皆さんに、この困難を直視し、自分の立場でできる事を考え、困難を越える為の力を貸して頂きたいからです。今回の災害発生にあたり、名古屋大学は東日本大震災対策本部を立ち上げ、医師の派遣、支援物資の発送、そして義援金を集める活動を行っています。本日この会場にも、募金箱を用意してあります。どうか今日の皆さんの心を、被災に苦しむ人々に届けてくださるようお願いいたします。

さて、私は、毎日ニュースを見るたびに、深く心が痛みます。きっと皆さんも同じ思いであると思います。ご存じのように、震災の結果、福島県の原子力発電所で深刻な問題が発生しています。まず、環境破壊と健康被害を最小限に抑える事が必要ですが、今後長く続く問題として、電力不足が予測されます。関東地方では、夏には、最大1500万kwの電力不足が予想されています。しかし、日本は、東



と西で電気サイクル数の違いがあり、東日本の電力不足を西日本が補完できる電力は100万kwで最大必要量の15分の1に限定されています。従って、現在の東日本の電力不足は長期化し、産業、経済に大きな影響を与える事が予測されます。

この状況であるからこそ、たまたま震災を免れることのできた者として、皆さんには、日本の経済を今までも増して支え、活性化していくことが求められています。大切なことは、悲しみに浸る事だけではありません。私達は、これからの日本の復興にどうしていくかといふ事に対して責任を持っています。現在の状況を、冷静に、科学的に見つめ、明日の日本へとつなげていく活動が必要です。

さて、皆さんの入学された名古屋大学について少しお話したいと思います。名古屋大学は、その創基を、明治4年に開設された尾張藩の仮病院・仮医学校に遡ります。その後、幾度かの存続の危機を越え、昭和14年に総合大学としての名古屋帝国大学が創立されました。現在では、9学部・13研究科・3研究所からなる中部の基幹大学です。今年、仮医学校として出発してから140年、名古屋帝国大学として総合大学になってから72年を迎えます。

140年にわたる名古屋大学の歴史はいくつか特徴を持っています。少しお話したいと思います。

まず特徴の第1として、名古屋大学は常に中部の発展と共にあり続けたことであります。ご存じのように、中部は国際的な産業の集積地であります。2005年の統計によれば、実に日本の黒字の59%は名古屋港から出荷されています。また、愛知県の産生する車、鉄、プラスチック、セラミクス、ゴム等は日本一の産生量を誇ります。すごいことですね。ですから、名古屋は正に日本の産業の心臓部であり、他の地域とは全く違う個性を持っています。その

中にある名古屋大学は、常に中部地区の産業の人材育成の柱を担っています。具体的に挙げますと、トヨタ自動車を世界一の企業へと育て上げられた豊田章一郎全学同窓会長をはじめ、本日ご臨席の柴田昌治日本ガイシ株式会社取締役相談役、丹羽宇一郎中国大使など、日本の産業界を牽引する多くの方々を、名大は輩出してきました。さらに、名古屋大学には、赤崎 勇先生そしてトヨタ自動車の内山田竹志副社長等、新しい産業を生み出す画期的な貢献をされた方が見えます。赤崎先生は、青色発光ダイオード（青色LED）の発明をされた方です。青色発光ダイオードは、例えば交通信号など、今では社会の様々な分野で使われています。赤崎先生は、不可能とされた課題に40年の歳月をかけ、粘り強く挑戦し、3万2千人の雇用を創出し、新たに売り上げ3兆6千億円の製品の開発につながったと評価されています。

さて先ほど、東日本大震災で福島原子力発電所が被災した結果、長期にわたり電力不足が起きると話しました。今この背景にある問題として世界のエネルギー資源がどうなるかという非常に大きな問題があります。例えば、世界の石油の埋蔵量はあと何年もつとされているかご存知ですか。

100年、200年ででしょうか。

資源エネルギー庁の試算では40年とされています。21世紀半ばになれば、石油が枯渇する時代が来るかもしれないのです。その中で皆さんは生きていかなければいけない。そのためにはどうしたらいいか。その1つの回答が、青色LEDですし、ハイブリッド車のプリウスです。こういう画期的な開発というのは非常に大事なんです。

もう1点、本日ご臨席の柴田全学同窓会副会長の日本ガイシ株式会社では、車の排気ガス処理装置を開発し、世界のシェアの60%を占めています。この装置の開発によって、大気汚染が著明に抑えられています。

LED、ハイブリッド車、排気ガス処理装置に共通するキーワード、それは持続可能社会 sustainable society の実現です。人類社会が持続できるための研究開発がいま求められています。これから研究を始める皆さん、どうかこの言葉を心に留めておいてください。

名大の第2の特徴は、研究者の育成にあります。名古屋大学は、自由闊達な学風を誇り、豊かな人間性を持つ勇氣ある知識人の育成を学術憲章に掲げてきました。2008年、皆さんもご存じのように、名古屋大学の卒業生である益川敏英先生と小林 誠先生がノーベル物理学賞を受賞されました。また、名古屋大学の助教授を務められた下村 脩先生がノーベル化学賞を受賞されました。3人の先生方に先立ち、2001年には野依良治先生がノーベル化学賞を受賞されておられます。4名の先生方の業績は、名古屋大学の自由闊達な学風が生み出したものとも言えます。4名の先生方には、名大の特別教授として指導をお願いしています。益川先生は、昨年4月から素粒子宇宙起源研究機構の機構長として、名大で研究指導を始められました。皆さんも、学内でお会いする機会があると思います。

もう1つ、名古屋大学の第3の特徴は国際化にあります。昨年11月1日現在で、75の国と地域から1,665名にのぼる留学生を受け入れています。また、今年3月1日現在で、296の大学・研究機関との間で学術交流協定を結び、国際的な人材育成を図っています。

また、今年の秋には英語ですべての授業を行うグローバル30がスタートします。こういう経過からもわかるように、名古屋大学は小さな国際社会なのです。皆さんの、名古屋大学大学院での生活が、世界へ大きく視野を開き、人類の未来を担う人材として育つ契機となることを、私たちは願っています。「名古屋大学からNagoya Universityへ」、これが私たちの大学改革の目標であります。語学を磨いてください。そして、国際的に活躍してください。

正直なところ今、日本はあまり元気がありません。皆さんも実感しておられると思います。リーマンショックの不況からの脱却がまだ十分でなく、多額の財政赤字を抱え、超高齢少子化社会に突入しています。そして今回の大震災は、日本にどのような影響を与えるのか、まだ見えていません。更に深刻な問題は、日本がよいよい人口減少社会に入る事です。2005年現在で日本の総人口は12,777万人ですが、現状の出生率のままなら、2055年の予測値では、8,993万人と70%に減少します。さらに、15歳から64歳までの労働人口が、2005年の8,445万人から2055年には4,599万人と54%（半分）に減少することが予想されています。

今、我々は、時代の転換点に生きているのかもしれない。日本という国が、活気を持った存在として存続できるかどうか、試されているように、私は思います。誤解を恐れず、あえて申し上げれば、東京への過度の一極集中が様々な問題を生み出しています。県別の特殊出生率をみると、圧倒的に低い地域が東京です。若者が東京に集中し、十分な支援なく家庭を築く困難を抱えていることから、人口減少は生まれていると、私には見えます。さてこの時代の中で、キーポイントは、日本の未来を切り開く君たちの能力をどれだけ高く多様に広げる事が出来るか、そういうサポートを我々大学ができるかどうかであると思います。特にその中で、中部の基幹大学として、名古屋大学の真価が本当に問われている時代が来たといえます。今日名古屋大学大学院に入学した皆さんが、存分に力を発揮し、活躍されることが日本の未来につながります。君たちの新しい発想と、努力と、そして私達が何よりも期待したいものは、覚悟と決意です。どうか将来、名古屋大学の先輩たちに続く人材に育っていただきたい。また、名古屋大学の歴史を誇りと思って自信を持って活動していただきたい。今日はその1歩を踏み出す日であります。

色々申し上げましたが、これからの皆さんの大学院生活が、実感に満ちて、いろんな出会いがあって、素晴らしい生活であることを心から願っています。本日はご入学おめでとうございます。

平成23年度学部入学式祝辞

名古屋大学総長 濱口 道成

皆さん。名古屋大学へ入学おめでとうございます。本日ここに、2,293名の皆さんを名古屋大学へ迎えることとなりました。皆さんの入学を心から祝います。

さて今日は本来ならば、皆さんの入学を大学を挙げて祝うべき日ではありますが、まず始めに、申し上げる事があります。ご存じのように、3月11日、東北地方を中心に東日本大震災が起きました。被災され、現在も困難な状況にある方々に、心よりお見舞いを申し上げますと共に、不幸にもお亡くなりになった方々のご冥福をお祈り申し上げます。

この震災により、多くの日本人が、そして皆さんと同世代の若者が、命を奪われました。3日現在警視庁のまとめでは、亡くなられた方12,009人、安否不明の方15,472人と報告されています。既に、3万人近い人々が行方不明となるか、亡くなられています。まだ全容が明らかではありません。

今この瞬間も、被災地では皆さんと同世代の若者が、家族を失い、家を失い、厳しい生活を強いられています。そして、今日の入学式も、このような未曾有の災害の中にあるのです。実際、関東地方を中心に多くの大学が、入学式を中止し、授業開始の時期がまだ決まっていない大学も多数あると聞いております。

さて、皆さんはどう思われますか。私たちはどうするべきなのかと。

名古屋大学においては、議論の結果、簡素に入学式を行うこととしました。

何故だと思われますか。

それは、いまこの日本が直面している未曾有の困難な時期にあたって、大学に入学する皆さんに、この困難を直視し、自分の立場でできる事を考え、困難を越える為の力を貸して頂きたいからです。今回の災害発生にあたり、名古屋大学は東日本大震災対策本部を立ち上げ、医師の派遣、支援物資の発送、そして義援金を集める活動を行っています。本日この会場にも、募金箱を用意してあります。どうか今日の皆さんの心を、被災に苦しむ人々に届けてくださるようお願いします。

さて、私は、毎日ニュースを見るたびに、深く心が痛みます。きっと皆さんも同じ思いであると思います。ご存じのように、震災の結果、福島県の原子力発電所で深刻な問題が発生しています。まず、環境破壊と健康被害を最小限に抑える事が必要ですが、今後長く続く問題として、電力不足が予測されます。関東地方では、夏には、最大1500万kwの電力不足が予想されています。しかし、日本は、東と西で電気サイクル数の違いがあり、東日本の電力不足を西日本が補完できる電力は100万kwで最大必要量の15分の1に限定されています。従って、現在の東日本の電力不足は長期化し、産業、経済に大きな影響を与える事が予測されます。

この状況であるからこそ、たまたま震災を免れることの



できた者として、皆さんには、日本の経済を今までにも増して支え、活性化していくことが求められています。大切なことは、悲しみに浸る事だけではありません。私達は、これからの日本の復興をどうしていくかといふ事に責任を持っています。現在の状況を、冷静に、科学的に見つめ、明日の日本へとつなげていく活動が必要です。

さて、皆さんの入学された名古屋大学について少しお話ししたいと思います。名古屋大学は、その創基を、明治4年に開設された尾張藩の仮病院・仮医学校に遡ります。その後、幾度かの存続の危機を越え、昭和14年に総合大学としての名古屋帝国大学が創立されました。現在では、9学部・13研究科・3研究所からなる中部の基幹大学です。今年、仮医学校として出発してから140年、名古屋帝国大学として総合大学になってから72年を迎えます。

140年にわたる名古屋大学の歴史はいくつか特徴を持っています。少しお話ししたいと思います。

まず特徴の第1として、名古屋大学は常に中部の発展と共にあり続けたことであります。この中部は国際的な産業の集積地であります。2005年の統計によれば、実に日本の黒字の59%は名古屋港から出荷されております。また、愛知県の車、鉄、プラスチック、セラミクス、ゴム等は日本一の産出量を誇ります。すごいことですね。ですから、名古屋は正に日本の産業の心臓部であり、他の地域とは全く違う個性を持っております。その中にある名古屋大学は、常に中部地区の産業の人材育成の柱を担っています。具体的に挙げますと、トヨタ自動車を世界一の企業へと育て上げられた豊田章一郎全学同窓会長をはじめ、本日ご臨席の柴田昌治日本ガイシ株式会社取締役相談役、丹羽宇一郎中国大使など、日本の産業界を牽引する多くの方々を、名大は輩出してきました。さらに、名古屋大学には、赤崎勇先生そしてトヨタ自動車の内山田竹志副社長等、新しい産業を生み出す画期的な貢献をされた方が見えます。赤崎先生は、青色発光ダイオード（青色LED）の発明をされた方です。青色発光ダイオードは、例えば交通信号など、今

では社会の様々な分野で使われています。赤崎先生は、不可能とされた課題に40年の歳月をかけ、粘り強く挑戦し、3万2千人の雇用を創出し、新たに売り上げ3兆6千億円の製品の開発につながったと評価されています。

さて先ほど、東日本大震災で福島原子力発電所が被災した結果、東京では長期にわたり電力不足が起きると話しました。皆さんは、世界の石油の埋蔵量はあと何年もつとされているかご存知ですか。100年、200年？

資源エネルギー庁の試算では40年とされています。21世紀半ばになれば、石油が枯渇する時代が来るかもしれないのです。先ほど名前に触れた、内山田副社長はプリウスの開発責任者です。21世紀にはどのような車が必要かを議論した結果、石油資源に限りがある事からハイブリッド車が生まれました。

もう1点、本日ご列席の柴田全学同窓会副会長の日本ガイシ株式会社では、車の排気ガス処理装置を開発し、世界のシェアの60%を占めています。この装置の開発によって、大気汚染が著明に抑えられています。

LED、ハイブリッド車、排気ガス処理装置に共通するキーワード、それは持続可能社会 sustainable society の実現です。人類社会が持続できるための研究開発がいま求められています。これから研究を始める皆さん、どうかこの言葉を心に留めておいてください。

名大の第2の特徴は、研究者の育成にあります。名古屋大学は、自由闊達な学風を誇り、豊かな人間性を持つ勇氣ある知識人の育成を学術憲章に掲げてきました。2008年、皆さんもご存じのように、名古屋大学の卒業生である益川敏英先生と小林 誠先生がノーベル物理学賞を受賞されました。また、名古屋大学の助教授を務められた下村 脩先生がノーベル化学賞を受賞されました。3人の先生方に先立ち、2001年には野依良治先生がノーベル化学賞を受賞されておられます。4名の先生方の業績は、名古屋大学の自由闊達な学風が生み出したものとも言えます。

4名の先生方には、名大の特別教授として指導をお願いしています。益川先生は、昨年4月から素粒子宇宙起源研究機構の機構長として、名大で研究指導を始められました。皆さんも、学内でお会いする機会があると思います。

もう1つ、名古屋大学の第3の特徴は国際化にあります。昨年11月1日現在で、75の国と地域から1,665名にのぼる留学生を受け入れています。また、本年3月1日現在で、296の大学・研究機関との間で学術交流協定を結び、国際的な人材育成を図っています。また、今年の秋には英語ですべての授業を行うグローバル30がスタートします。こういう経過からもわかるように、名古屋大学は小さな国際社会なのです。皆さんの、名古屋大学での生活が、世界へ大きく視野を開き、人類の未来を担う人材として育つ契機となることを、私たちは願っています。「名古屋大学から Nagoya University へ」、これが私たちの大学改革の目標であります。語学を磨いてください。そして、国際的に活躍してください。

さて我々が、なぜ名古屋大学を国際化したいかというと、実は皆さん自身に理由があります。統計的に見ますと、君達の出身は、その75%が東海4県の出身です。東海4県の出身の人、手をあげてください。多いですね。もう1つ聞きます。自宅から通学している人。たくさんいますね。今

手をあげた人は、速やかに下宿することを実現して下さい。一人前になるということは、孤独を知ることです。人は1人で生きていかなければならないのです。下宿してください。

皆さんの先輩の中には、名古屋の自宅から大学へ通って、しかも、就職も名古屋で、名古屋市内から生涯1歩もでない生活をしている人が結構います。私たちはこれを問題と考えています。君たちが就職する企業は、トップレベルの実績がある企業なのですが、大半が中部地区の企業です。しかしほとんどの企業は、国際的な企業であり、君たちは、将来国際的な場で勇氣と判断力を示すことのできる人材に育つ事を求められています。一方、昨年、日本はGDPで世界2位から3位になったと話題になりました。しかし、君たちが企業の一線で活躍するところには、世界どころかアジアの4位か5位のGDPになっているという試算があります。もし皆さんが日本の活力を維持したいと考えるなら、皆さんにとって、世界を舞台に活躍することは当たり前の時代が来ます。「名古屋大学から Nagoya University へ」。入学するときは domestic に、卒業時するときは international に。地方のすばらしい文化を堅持した国際人になっていただきたいと思います。

さて、今日の入学式に、もう1度震災についてお話ししたい事があります。今回の東日本大震災にあたり、私は海外の友人から多数のメールを受け取りました。メールの中で、彼らが異口同音に述べている事は、日本人の静かな強さ、お互いを思いやる心、です。そして、彼らは言います。きっと日本は復興できるだろう、と。私は、改めて日本の持つ文化の粘り強さ、素晴らしさを海外の友人から教えられました。更に、震災に苦しみつつ、必死に活動されている方々、津波から住民を救おうと活動し、不幸にして命を失われた方々が、私達に語りかけている事があります。それは、かけがえのない存在として、家族、友人を大切にすること。大学で勉強できる事の幸福を実感して、毎日毎日を真剣に、誠実に生きてください。そうして、名古屋大学に入った今日を境に、あなた自身の志を立てていただきたい。自分がどうしたら社会の役に立てるか、よく考えて、自分なりの志を立てて勉強して下さい。大学で過ごす4年間は、その準備期間であります。短い期間ですが、自分がどんな人間になりたいのか、どんな生涯を描くか、どうしたら自分の力を発揮して人に貢献できるのか、そのためには、勉強をしていただきたい。これは、今回の大震災が私たちに残した大切な教訓です。

今日この入学式を迎えるにあたり私からもう1つお願いがあります。大学時代に、沢山の友人を作り、サークル活動、社会活動に参加して下さい。なぜ、授業以外の活動を勧めるのか。それは、いろんな体験を通じて、皆さんは自分の中に眠る潜在的な能力に気がつくからです。大学は、そういう自分の中にある可能性をチャレンジして確かめてみる期間なのです。環境が整えば震災復興のボランティアに応募して下さい。

色々申し上げましたが、皆さんの学生生活が、多くの出会いと、実り多い体験に満ちることを願って今日の祝辞とさせていただきます。本日は入学おめでとう。

来賓祝辞（大学院入学式）

柴田 昌治 名古屋大学全学同窓会副会長
日本ガイシ株式会社取締役相談役

ただ今、ご紹介をいただきました全学同窓会の副会長を務めております柴田と申します。本日皆さんが名古屋大学の大学院に無事入学をされましたこと、誠にめでたうございます。

先ほど総長よりお話ありました3月11日に発生した東日本大震災ですが、1,000年に1度といわれる空前の規模であり、続けて発生した大津波も非常に広範囲な地域を襲いました。我々がテレビなどの報道を通じて見る惨状というのは、本当に凄まじいものでありました。皆様の中にもご親戚、あるいはお知り合いの方が被災された方もいらっしゃるでしょう。そして、東京電力福島第1原子力発電所の事故については、事態の収束に向け日本の国を挙げて、あるいはアメリカ、フランスなど諸外国の力を借りながら悪戦苦闘しておりますけれども、残念ながら今なお解決しておりません。この未曾有の国難ともいえる事態を1日も早く収束させ、放射性物質の放出による被害を最小限に食い止めるべく、国民全員が立ち上がって対処すべきだと考えております。

いま「国難」というお話をしましたが、この日本という国は、近代以降大きな困難を何度か乗り越えてきております。ひとつには明治維新がありました。新しい近代制度をドイツ、フランス、アメリカ等から取り入れて、非常に早いスピードで古い封建制度からの近代化を成し遂げたのが明治維新でありました。その背景には、日本の国民が総じて非常にレベルの高い教育を受けていたことが一番大きかったということです。日本では、大小多くの藩に分かれている時代から、藩校や寺子屋による教育が行われていました。

次に第2次世界大戦からの復興がありました。東京、名古屋もそうですけれども、日本中が焼け野原になり、さらには広島と長崎には原子爆弾が世界で初めて投下され、「日本では100年以上ペンペン草も生えない」といわれた時期もありました。けれども、今、広島も長崎でも当時の面影は全くなく、人々は戦争と原爆の困難の中からの復興を成し遂げております。終戦時、日本全体でも非常に貧しい状態であり、当時私は8歳でしたけれども、食べるものに非常に困る時代でした。「一番ありがたい」ということを「米の飯」と表現していたほどです。現在の皆さんには想像がつかないでしょうけど、お米というものが、それほど貴重であった時代があったのです。

そして今我々は、東日本大震災からの復興という新たな困難に直面しております。なぜこういうことを申し上げるかということ、先ほど総長のお話にもありましたように、我々はこれから必死になって日本をまた世界に誇りうる、国際社会における存在感を取り戻す必要があります。その



ためには今日ご入学をされた皆さん、つまり大学院で更なる学業に励み、将来社会におけるリーダーの立場になろうとする皆さんが、全国の人々の先頭に立って、それぞれ1人が一体この国に対して何ができるのか、どういう貢献ができるのかということを考えていただき、行動していただきたいと思うからであります。

先ほどお話ししたように、日本はこういった国難といえますか、非常に難しい局面から、必ず立ち直ってきました。私は今回のこの大震災からも間違いなく立ち直ると信じております。というのは、海外のメディアが高く評価しているように、被災地における日本人というのは共同して、助け合って復興を始めております。暴動や略奪などはほぼ皆無です。日本人が昔から心の中に育ててきた和の精神というのを垣間見る気がします。そして、復興に際しては、当然のことながら政府が主導して相当大規模な復興計画を立案しなくてはなりません。今後こういう災害がまたいつ来るかも分かりませんから、いろいろな見地から総合的にかつ科学的に将来の予測を立てながら、どのようにこの国を復興させていくかということが話し合うのが非常に大事なことだと思えます。

さて、私どもは8年前にこの名古屋大学の全学同窓会という組織を発足させたのですが、皆さんには全学同窓会が設立された経緯と目的についてお話しさせていただきたいと思えます。

まず申し上げたいのは、世界はグローバリゼーションの真っ只中にあり、皆さんには是非意識していただきたいのは「グローバルアイ」ということです。この「グローバルアイ」が何かといいますと、どんな研究でも取り組む際には、または、どんな事業でも新しく興す際には、グローバルスタンダードを参照にしないといけない。いろんな局面において、日本の中の価値観だけで判断・評価はいけない。アメリカやヨーロッパ、あるいはBRICsといわれるような、中国やインドなど世界全体を見渡しながら、自分の研究し

ていること、あるいは自分がやろうとしていることがどういうレベルにあるのか、と常に意識をしつつ、頑張っただけかなければならないと思います。今、名大の卒業生というのは累計で約10万人いますけれども、その人たちが全学同窓会が媒介し何とかネットワークでつなぐことは出来ないか。そして名大の卒業生を将来に向けてグローバルなネットワークに組み込めないか、それが全学同窓会の主な目的であります。全学同窓会の支部は、北京や上海、あるいはベトナムなどいろんな国々にあります。皆さんが今後世界を舞台に活動をしていく際、それらの支部を足がかりとして頂きたい。必要があれば、国内外問わず名大の卒業生へコンタクトができる、そういう役割を持った全学同窓会を作りたいということで、豊田章一郎さんを会長にし、我々が副会長という立場で平成15年に立ち上げた次第です。

少々話題を変えまして、日本が海外の人達からどのような目で見られているかということをお話したいと思います。先ほど濱口総長からも「日本に活気がない」というお話がありました。大変残念なことですが、海外の方が日本という国を見る目がどんどん冷たくなってきているのです。日本が国際的な地位を上昇させなければ、この傾向を止めることができないでしょう。

ある1例を紹介します。スイスのダボスという小さな山村で毎年開催される通称「ダボス会議」と呼ばれる国際的な会合があります。毎年1月末に開催されるこの会合には、世界中から約2,500人の政治・経済・大学など各分野のリーダーが集まって、多岐に渡る世界的な問題・テーマについて討議しています。私はこれに10年来参加してきました。1週間の会期中に200以上の分科会が開催されますが、分科会で取り上げられるテーマは、世界がそのとき何に注目しているかを計るバロメーターとも言えます。一昨年のものでしたけども、その年は日本に関する分科会がたった1つだけしか開催されませんでした。その題は、「Japan: A forgotten Power」、つまり「世界から忘れ去られた国、日本」と銘打たれたものでした。また出席者はほんの数十名であり、その殆どが日本人でした。

私がダボス会議に参加し始めた当初は、日本についての分科会は数多く開催され、日本からも大勢参加者があり活発に討議をしておりましたが、一昨年はたった1つだけ、昨年に至ってはゼロとなってしまいました。一方、世界が注目する国々、BRICsといわれる中国、インド、ブラジル、ロシアなどの国々については、最近では分科会が5つも6つも開催されます。先ほども申しあげましたとおり、会合の数は国際社会におけるその国の存在感のあらわれであり、日本は近年その存在感の低下が著しいと思います。

もう1つ、ダボス会議の話を通じて申しあげたいのは、分科会が数多く開催される国々からは、留学経験のある大臣・閣僚級が分科会に参加をし、英語にてディベートを行い、自国のメッセージをその場で直接発信しているということです。

日本の大学生の海外経験ということをお話しますと、たとえば今年度、名大の大学院から私どもの会社に8人の方が新しく参加をしてくれたのですが、その人たちの留学経験というのは残念ながらありませんでした。留学であろうが何であろうが、海外で学んで客観的に外から日本を見る

という目を養うことがグローバルアイの基本なのですが、そういう国際的な感覚を持つという意識が、大学の大学院生に非常に少ないことの現れではないかと危惧しております。そしてそれは日本の社会の構造もしくは我々ビジネスマンにも言えることかもしれません。

この状況を打開する為には、企業が学生の採用を行う際、留学経験のある学生を優先的に採用するといったようなことを、日本経団連など経済界をあげてやるべきだと思っております。たとえば「大学3年生の時には海外へ留学する」ということを是非、国および経済界として推奨するということをお呼びかけたいと考えております。

少し長くなってしまったので、あと2つ皆さんにお願いして終わりたいと思います。

1つは本を読んでいただきたいということです。本というのは古典であれ何であれ、最低月に1冊ぐらい、昔の先輩が書いた本、先輩というのは「大学の」という意味ではありません、「人類の」先輩が書いた本を読んでいただきたいということです。これは是非習慣づけて欲しいと思います。

それから、大学というのは友人を作る、親友を作る場であると思います。人が一生を生きていく中で最も大事なことは、友人を作るということではないでしょうか。そしてこの名古屋大学は、先ほど総長のお話にあったように、たくさん留学生を受け入れている大学です。つまり世界中の友人を作る格好の場であると思います。留学生の方々と友人になり、ネットワークを形成することは人生において非常に有益なことであります。

違う国の人たちとのネットワークの重要性については、米ハーバード大学の学長も強調しております。彼女が今年来日しインタビューに応えた際、日本からハーバード大への留学する学生数の減少を非常に危惧していました。去年のハーバード大へ入学した日本人学生はたった1人だったそうです。なぜこんなに日本の学生が来なくなったのかと。ハーバード大学に学んだ日本人の留学生数は累計で3,000人以上を超えるそうです。非常に高いレベルの学力をもった日本人学生が、それぞれの国の将来のトップリーダーと友人になり、コミュニケーションをする。そのことが日本の国際的な地位を高めることにどれだけ貢献してきたかということに、もっと思いを馳せてほしいということをお話しておられました。

戻りまして、皆さんが海外からの留学生とより強いネットワークを形成するには、名古屋大学がNagoya Universityになるということも大事ですし、また皆さん自身が世界に出かけて行って友人を作り、それぞれの国の将来のリーダーと連帯感を共有することがとても重要であると思います。その積み重ねが、日本を国際社会においてより存在感のある国にするということになる。このことを是非、頭の中に入れて、今後の学生生活を送っていただきたいと思っております。

本当に本日は入学おめでとうございました。先輩として心より歓迎を申し上げます。おめでとうございました。

来賓祝辞 (学部入学式)

柴田 昌治 名古屋大学全学同窓会副会長
日本ガイシ株式会社取締役相談役

ただ今ご紹介をいただきました全学同窓会の副会長の柴田でございます。本日は皆さん、名古屋大学に入学されたこと誠にありがとうございます。全学同窓会を代表いたしまして、お祝いの挨拶をさせていただきます。

私は昭和34年に法学部を卒業したのですが、私が入学した当時はこんな立派な講堂どころか、東山キャンパスそのものがまだありませんでした。教養部と呼んでいた最初の2年は滝子にあった校舎へ、あとの2年は名古屋城の三の丸にあった陸軍の古びた校舎へ通っておりました。今は三の丸庭園なんて洒落た名前が付いていますけれど、この東山キャンパスが出来たのは私が卒業してからであります。ですからここに来てどうも自分の母校だと実感が持てないぐらいです。そういう面ではこういう素晴らしい環境のもとで勉強ができる皆さんは非常に幸せだなと、つくづく思う次第です。

さて、冒頭の総長の挨拶にもありましたように、3月11日に発生した東日本大震災は、1,000年に1度といわれる空前の規模の地震であり、続けて発生した大津波も非常に広範囲な地域を襲いました。そして非常に残念ながら、東京電力の福島第1原子力発電所の事故は未だ収束されておりません。「日本はどう対処するのか」と連日、日本の状態が世界中に報道されています。消防、自衛隊、警察、あるいはアメリカやいろんな各国からの救援隊が、この大震災と津波、そして原子力発電所の事故から被災地を救うために活動しているのを、皆さん毎日テレビで見られますかと思えます。亡くなられた方、被災された方、あるいは避難されている方々のご苦勞を思うと、本当に胸が痛くなる思いがいたします。

しかし、日本はこういった非常に難しい状況から過去何度も立ち直ってきました。私は今回のこの大震災からも間違いなく立ち直ると信じております。

例えばですが、まず、第2次世界大戦の敗戦からの復興がありました。私は昭和12年、1937年の生まれですが、8歳の時に終戦を迎えました。名古屋は大空襲の被害で家な



んぞは1つも残っていない焼け野原となってしまいました。で、そういう困難な状況下で日本人は、自分たちは日本人であるという誇りを保ちながら一生懸命働き、昭和30年代には世界から「日本の奇跡」といわれた復興を成し遂げました。

また、明治維新にも同じことが言えると思います。非常に古い徳川の封建時代から、若い下級武士が明治政府を作り、欧米の文化を強烈なスピードで吸収をして、日本を一流の国家に育て上げた。その原動力は、それぞれの小さな藩が持っていた藩校や、あるいは江戸時代の寺子屋にて行われていた教育と、そして「お互いに協力してこの国をよくしよう、働こう」といった精神が挙げられると思います。これらが、明治維新であり、第2次世界大戦からの復興でありを成し遂げた大きな要素ではなかったでしょうか。

そして我々は新たな困難に直面しております。今だからこそ日本人が世界に誇りうる民族の誇りをもう1度胸に抱いて、みんなが共同で助け合って、この国を作っていくということが必要とされています。その先頭には、ここにいらっしゃる2,293名の方が是非立っていただきたいと思います。

ここで、いくつか、新入生の皆さんに、先輩としてお願いをしたいことがあります。

先ほどの濱口総長の祝辞にもありましたが、今後グローバル化、つまり国際競争がますます激化していく時代に入っております。その中で、皆さんに期待することは、一人ひとりが国際人であって欲しいということで

す。かつて、日本の国際競争力が「世界第1位」と評価された時代がありました。スイスにIMDという国際力競争力を調査している研究機関がありますが、その調査によりますと、1990年台前半は日本の国際競争力はアメリカと並んで1位または2位でした。しかし、その後低下傾向になり、昨年の調査では27位となってしまいました。どうしてそんなに順位が落ち込んだかという、やはり国の政策そのものにも問題がありましたし、経済力にあまり頼りすぎて、国際競争力の原動力の1つである社会基盤の整備、たとえば基本的な高等教育だったり、語学力を備えた人材の育成だったりというようなことに対し、残念ながら少し力が抜けていたということにあります。ですから皆さんは是非、国際人になってほしい。国際人とはなんだという、違った国の違った環境で住んでいる人たちの主張を理解できる。その上で自分の立場・考え方をきちんと主張できるという人だと思います。もちろん英語など基本的な外国語を使えることが必要ですが、一番大事なことは相手のいいことを理解すること、そしてその違った立場から自分たちの立場を主張できることでもあります。私は名古屋の出身で、名古屋大学に入り、地元の会社に就職したわけですが、当時はしばらく名古屋でずっといるかと思っておりました。しかし、入社後すぐに大阪へ6年、そのあとニューヨークで7年、東京へ戻って10年、再度アメリカでの子会社の社長として5年、結局30年近く名古屋に住む機会がありませんでした。期せずして他の地域、国で暮らすことになったわけですが、そういう中で学んだことというのは、若い人は世界に出かけて行って、様々な経験をし、そこから日本という国を客観的に見るようになることがとても重要であるということです。そういう人たちが、国際人としてこの国を支えていくのではないのでしょうか。

現在、「就職の氷河期」などといわれ、大事な大学3年生の時期の多くを就職活動に携る先輩が多いということですが、これはどうしても直してゆかなくてはならないと思います。まず、皆さんにお願いしたいのは、3年生の時は必ず海外へ行って下さい。どんな形でもいい。その1年間海外で過ごしたことが、その後皆さんが立派な国際人として社会に貢献して生きていく上で、どれほどプラスになるかわかりません。そして就職を受け入れる我々側も姿勢を変えるべきです。企業が採用を行う際は、海外経験のある

学生を優先的に採用する方針に変えるべきですし、実際だんだんそういう雰囲気、日本のビジネス全体が変わってゆくでしょう。

これから日本がグローバリゼーションの中で競争してゆくためには、ひとりひとりが国際感覚でありグローバルアイを持ちつつ日々の仕事であり研究に臨んでいただく必要があると思います。つまり自分たちが研究をする際、同じ世代の中国の学生は何をしているのか、どのレベルにあるのか、ではアメリカの学生たちはどういうことを考えているのか、と。常にグローバルな見地からものを見ながら、それを頭に入れて行動していくということが、これから日本を強くしていく、もう1度、日本が世界の人々から尊敬される日本になるための最も重要なことだと思います。

あと2つお願いしたいこととして、大学時代には友人を作るということです。勉強をするのはもちろん当たり前ですが、一番大事なことは国籍を問わず友人を作ることではないかと思います。それから自分の国の歴史と文化を理解するために、やはり本を読むこと。皆さんはコンピュータや携帯電話は毎日操作しているかと思いますが、本はどうでしょうか。そこで一月に1冊、できれば2冊ぐらい、古典など昔の人のものの考え方や、世界の名作といわれる作品を読むという習慣を必ず付けてほしいと思います。この2つがお願いであります。

先輩として、入学式にあたりまして、少しお説教がましいことになりましたけれども、是非、今申し上げたことを覚えておいていただいて、有意義な学生生活を送っていただきたいと思います。本日は誠にありがとうございました。

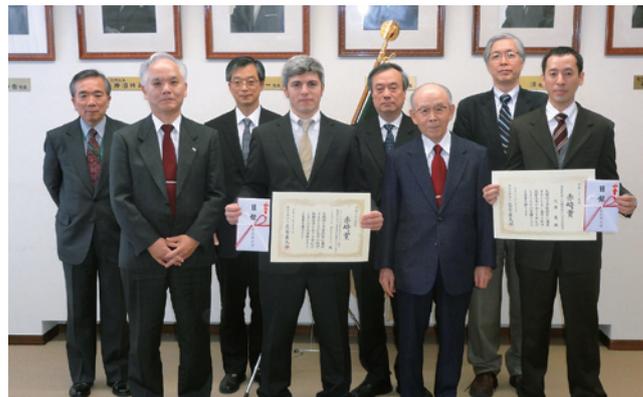


平成22年度「赤崎賞」授賞式を挙

平成22年度「赤崎賞」授賞式が、3月16日(水)、本部1号館において挙行されました。同賞は、赤崎 勇本学特別教授の偉大な功績を称え、本学の若手研究者に対して、産学官連携を通じた研究開発の重要性と赤崎特別教授の偉業を広く伝えることを目的として設けられた顕彰制度で、今回が第1回目となります。

本学に在籍する当該年度の4月1日時点で35歳以下の学生及び研究者のうち、学術・科学技術分野で将来的な発展や可能性が期待でき、本学の科学技術水準を内外に知らしめることができる研究を行っている方を対象としており、昨年12月から募集を始め、産学官連携推進本部長らを委員とした赤崎特別顕彰審査委員会で厳正な審査を行いました。13件の個人、団体からの応募があり、厳粛な選考の結果、ウヤヌク・ムハメット工学研究科助教及び久原 篤理学研究科講師が選ばれました。

ウヤヌク助教の研究テーマは「レアメタルの代替元素としてヨウ素を触媒的に用いる環境調和型酸化反応の開拓」で、日本が生産量第2位を誇るヨウ素に着目し、遷移金属錯体の代わりにヨウ素化合物を不斉触媒に毒性の強い重金



赤崎特別教授（前列右から2人目）を囲んでの記念撮影

属酸化物の替わりに過酸化水素を酸化剤に用いる環境調和型不斉酸化反応の開発に世界に先駆けて成功したことが評価されました。

久原講師の研究テーマは「温度受容と記憶学習の分子生物学」で、「線虫 *C. エレガンス*」を使った感覚と記憶学習にかかわる遺伝子と、神経ネットワークのしくみのエッセンスを解き明かす研究により、「学習記憶」と「温度感知」の仕組みの解明や、それらが関わる人間の疾患の原因解明につながる発見が評価されました。

授賞式では、まず、濱口総長のあいさつ及び赤崎特別顕彰審査委員会委員長である宮田理事から受賞者の発表と講評があり、次いで、赤崎特別教授から受賞者に正賞の表彰状と、副賞の賞金50万円が贈呈されました。

受賞者の2人は、それぞれ、自分たちの研究が、本学の学術研究のさらなる向上の一端を担うことにより、赤崎特別教授のような功績に一步でも近づけるよう努力を重ねたい旨、受賞の喜びと赤崎特別教授に対する感謝と尊敬の謝辞が述べました。



研究内容を説明するウヤヌク助教



研究内容を説明する久原講師

平成23年度科学技術分野の文部科学大臣表彰者が決まる

平成23年度科学技術分野の文部科学大臣表彰受賞者が決定し、本学から7名が受賞しました。

この表彰は、科学技術に関する研究開発、理解増進等において顕著な成果を取めたものについて、その功績を讃えることにより、科学技術に携わる者の意欲の向上を図り、我が国の科学技術水準の向上に寄与することを目的として

おり、「科学技術賞（開発部門、研究部門、科学技術振興部門、技術部門、理解増進部門）」、「若手科学者賞」、「創意工夫功労者賞」、「創意工夫育成功労学校賞」の各賞に分かれています。

受賞者は以下のとおりです。

■科学技術賞（研究部門）

受賞者：佐藤 一雄 工学研究科教授
業績名：単結晶シリコンを対象とするマイクロナノ機械理工学研究

■若手科学者賞

受賞者：浦口 大輔 工学研究科講師
業績名：分子認識型キラル有機イオン対触媒の創製と応用の研究

受賞者：桂木 洋光 環境学研究科准教授
業績名：衝突現象の基礎物理に関する研究

受賞者：北浦 良 理学研究科准教授
業績名：ナノ空間を利用した物質科学の開拓の研究

受賞者：西堀 英治 工学研究科准教授
業績名：放射光 X 線を用いた結晶構造解析の研究

受賞者：野中 千穂 基礎理論研究センター助教
業績名：量子色力学相図の現象論と第一原理による包括的な研究

受賞者：関 華奈子 太陽地球環境研究所准教授
業績名：惑星起源イオンのダイナミクスに着目した太陽地球環境の研究

学術奨励賞授与式を挙る

名古屋大学学術奨励賞授与式が、3月24日（木）、シンポジオンホールにおいて挙行されました。

同賞は、学術憲章に定める「人間と社会と自然に関する研究と教育を通じて、人々の幸福に貢献することを、その使命とする」という基本理念に基づき、本学の大学院博士課程後期課程に入学又は進学した特に優秀、かつ、将来の

有望な学生に対して、その教育研究活動を奨励することを目的として設立されたものです。

受賞者は、大学院博士課程後期課程に在学する学生で、人物・研究水準ともに特に優秀で、かつ指導教員及び研究科長から推薦のあった者から決定され、年度末に奨学金として年額50万円（授業料相当額）を各年次生50名程度に給付されます。今回は、大学院博士課程後期課程に入・進学した1、2年次生を対象に、各年次50名計100名が受賞者として決定されました。

式には、100名が出席し、濱口総長から各研究科の代表者にそれぞれ賞状が授与され、「社会貢献が求められる中、人類社会が持続可能となる解決法は科学の発展の中にある。持続可能な社会を実現するためにも、今抱えている困難に挑戦し続ける有為な人材になっていただきたい」と激励の言葉がありました。



記念撮影

第32回経営協議会を開催



会議の様子

第32回経営協議会が、3月27日(日)、鶴舞地区にある鶴友会館において開催されました。

会議では、濱口総長からあいさつの後、平成23年度学内予算配分(案)、平成23事業年度における長期借入金の借入れ・償還計画等、平成23年度計画、人事関係諸制度の見直し、名古屋大学会計規程の一部改正(案)、平成23年度執行部体制等について各担当理事、副総長からそれぞれ説明が行われ、審議の結果、了承されました。

次いで、次期経営協議会委員、名古屋大学若手育成プログラム(YLC)、グローバル30構想調書の組み立て直し、平成23年度入学者選抜実施状況、名古屋大学基金への寄附状況、豊田講堂の登録有形文化財(建造物)の登録について報告が行われました。

外部委員の方々からは、平成23年度計画、取引金融機関の決定、YLC、入学者選抜実施状況に関して貴重な意見が寄せられました。

退職者表彰式及び退職職員懇談会を開催



あいさつする総長

名古屋大学退職者表彰式が、3月30日(水)、豊田講堂第1会議室において挙行されました。

これは、平成23年3月31日付けで退職する勤続30年以上の職員を表彰するもので、表彰式には、被表彰者26名のうち16名が出席し、濱口総長から被表彰者一人ひとりに表彰状と記念品が手渡されました。

続いて、総長から祝辞があり、永年にわたる本学への尽力に対する感謝のことばが述べられました。

引き続き、ユニバーサルクラブにおいて、名古屋大学退職職員懇談会が開催され、上記の被表彰者のほか、3月31日付けで定年により退職する職員をはじめとした関係者が出席しました。総長のあいさつの後、退職者を代表して岡田 秀工学部・工学研究科事務部長から謝辞が述べられました。退職者は、出席者と今日までの思い出などを語り、別れを惜しんでいました。

研究マネジメントセミナー2011を開催



講演する財満教授

研究マネジメントセミナー2011「研究グループを率いるために」が、4月8日(金)、豊田講堂第1会議室において開催されました。

このセミナーは、本学に新規採用後概ね3年以内の教員を対象に、個々の教員が、将来、研究グループのリーダーになる日に備え、研究マネジメントの基礎知識・スキルを確認しながら、想定される課題への対応を考えることを目的として開催されたもので、25名の参加がありました。

講師の財満鎮明工学研究科教授から、自らの経験をもとに、大学教員としての仕事や役割、研究テーマの設定、研究費獲得のノウハウ、研究室の運営、学生への対応など、実践的なテーマについてユーモアを交えて講演が行われ、参加者は熱心に聴講しました。

講演終了後の質疑応答では、多数の質問や相談が寄せられるなど、参加者の関心の高さがうかがわれ、セミナーは盛況のうちに終了しました。

第6回高等研究院レクチャーを開催

第6回高等研究院レクチャーが、3月29日(火)、野依記念学術交流館カンファレンスホールにおいて開催されました。

「環境学という学問を創る」をテーマに行われた今回は、本学教職員、学生や一般の方々など、約150名の参加がありました。

神沢 博環境学研究科教授の司会により進められ、ま



会場の様子

ず、グローバル COE プログラム「地球学から基礎・臨床環境学への展開」の拠点リーダーである安成哲三地球水循環研究センター教授が、「『地球学から基礎・臨床環境学への展開』のめざすもの」と題し、地域の環境の診断と治療に責任をもってあたる「臨床環境学」、また臨床を支える共通の基盤を地域の問題をまたいで構築していく「基礎環境学」のコラボレーションによって拓かれる最先端の環境学の創成や研究成果について紹介しました。

次に、中塚 武環境学研究科教授が、「人間社会は気候変動にいかに対峙できるか：高分解能古気候学を通して、歴史に学ぶ」と題し、気候・環境変動に対峙できる人間社会の在り方について解説した後、横山 智同研究科准教授が、「ラオスの環境問題：森林資源・人間活動・環境政策の諸相と動態」と題し、ラオスの農山村地域における自然と人間との相互関係及びその変化について講演しました。

引き続き、加藤博和同研究科准教授が、「人にも環境にもやさしい交通システムと地域づくりを目指して」と題し、低炭素型の交通システム・都市空間構造の理想像について、名古屋市を始め各地での低炭素型都市計画や地域交通計画の具体例を交え、講演しました。

名古屋大学の災害対策

東日本大震災により、お亡くなりになられた方々とそのご遺族に対し、深くお悔やみを申し上げます。また、被災された方々には謹んでお見舞いを申し上げるとともに、一日も早い復興を心よりお祈りいたします。

本学では、この未曾有の大災害にあたり、東日本大震災対策本部を設置し、義援金の募集、被災地への医師等の派遣、物資の輸送などを行ってきました。今後も可能な限り被災地の復興に向けた支援に取り組んでいきます。

以下に、本学の東日本大震災に対する支援状況と本学の災害対策に関してご報告をいたします。

名古屋大学総長 濱口 道成

災害対策本部における東日本大震災への対応

災害対策本部の立ち上げ

先ず、地震発生直後から、学内における人的・物的被害の状況について各方面に対し問い合わせを行いました。結果、幸いにも学内における人的被害は無く、エレベーターが停止する等はあったものの、目に見える物的被害もありませんでした。

週明け3月14日(月)の役員会では、義援金を学内の教職員から募ることを決定するとともに、濱口総長を本部長とする「東北地方太平洋沖地震災害対策本部（後に東日本大震災対策本部と名称変更）」を立ち上げ、学生の安否確認を急ぐこと、国・自治体や国立大学協会など他機関からの要請に基づき協力することなどを決定しました。

義援金募集活動

3月15日(火)から3月25日(金)までの間、学内構成員に対し、第1次義援金の募集を行いました。25日(金)に行った卒業式においては、卒業生及びその保護者にも協力を求め、合計で23,620,000円が集まり、31日(木)、愛知県被災地域支援対策本部長である大村愛知県知事に届けました。その後、入学式でも新入生及びその保護者に対し義援金を募集したため、第1次に間に合わなかつ



大村愛知県知事（左）に義援金を届ける総長（右）

た教職員からの義援金を合わせ、第2次義援金として約930,000円を4月末に再び愛知県に届けました。

入学試験合格者への対応

時期的に入学手続きと重なったため、被災者への入学金・授業料の減免措置を講じることや、入学手続き期間の延長を決めました。その後、入学手続きを行わなかった合格者全てに連絡をとり、震災の影響により手続きが出来ない者が居ないことを確認しました。

ホームページでの情報発信

本学ホームページを訪れたすべての人の目に止まりやすいように、トップページに特別コーナーを設置し、被災者の方々への総長コメント、安否情報の登録要請、入学手続きや入学金・授業料減免情報、被災地大学の学生への就職支援情報、再入国手続きをしないまま本国に帰国してしまった留学生への再入国手続きの情報を掲載するとともに、本学関係者に対し正しい情報に基づき冷静に行動するよう注意喚起するなど、情報の発信に力を入れました。

また、被災地域の大学に在席する学生や研究者の受け入れについて、研究室毎に一覧にしてホームページで希望者を募っています。本学では約125の研究室で約350名の受け入れが可能です。

学生の安否確認

被災地域（県レベル）所在の高等学校の卒業生及び被災地域を帰省先として登録している学部学生124名、大学院生94名について、3月15日(火)に全員の安全を確認しました。

なお、留学生を含む全ての在学生の安否確認については、4月26日(火)現在、学部99.9% 未確認7名、大学院99.9%、未確認1名という状態です。

被災地への物資提供、人材の派遣

国立大学協会の求めに応じ、災害救援物資として提供可能な物・量の調査を行い、被災地に物資を搬送しました。人的派遣については、東北大学の要請に基づき、施設系職員2名を災害復旧事務のために派遣しました。

なお、医学部附属病院における医師団等の派遣については後半部分「[医学部附属病院における東日本大震災への対応](#)」をご覧ください。

名古屋大学災害対策室を中心とした防災の推進

防災への取り組み（学内）

平成13年に名古屋市と愛知県の大部分が東海地震対策強化地域に編入され、地震防災対策が進んできました。本学では同年4月に大学院環境学研究科が発足し、翌年10月には、防災訓練や防災教育を通じて本学自身の防災力を強化しつつ、学内外の関係者との連携により、地域において防災を支える人の輪づくりや、防災力を高めるための様々な仕掛けづくりを進めることを目的とし、災害対策室を設置しました。

学内の防災対応については、建物・室内の安全性確保と、災害時の対応体制の徹底が重要なポイントになります。古い建物は耐震改修あるいは建て替えとなり、耐震性の劣る建物はほぼなくなりました。しかし、室内の家具や実験機材の転倒防止、危険な薬品等の対策などは、今後のいっそうの徹底が必要です。また非常時の体制に関しては、平成15年度から全学防災訓練を実施し、関連して規程類やマニュアルの整備、災害対応体制の構築、非常放送や非常時備蓄品の整備、災害情報提供や防災教育の企画・実施などを行ってきました。最近では、緊急地震速報や安否確認システムが整備されています。

東日本大震災による被災地の大学の状況に基づき、これからはさらに実質的な災害対応体制と、そのための平常時からの準備や訓練を徹底して進めることとなります。具体的には、キャンパスをいくつかのブロックにわけ、建物ごとに万全の対応体制をとることを目指します。

防災への取り組み（地域）

地域の安全・安心については、大学院環境学研究科が中心となって、平成14年から地域貢献事業「中京圏における地震防災ホームドクター計画」を推進し、ヒト・コト・地域の行政、市民、ライフライン、メディア、技術者、教育者、NPOなどと連携してきました。環境総合館の地域防災交流ホールや災害アーカイブは市民に開放され

今後の活動

被災地復興の支援活動を行うことも重要ですが、今後は、本学は大地震が起こる可能性の高い東海地区にあることから、大地震があっても可能な限りその被害を小さくとどめ、教職員・学生の安否確認を迅速・確実に行えるような体制等の構築にむけて具体的に検討することとしています。

していますし、防災アカデミーは毎月開催で70回近く行っています。在名古屋のメディア・研究者・行政がともに防災を考える懇話会「NSL (Network for Saving Life)」など、さまざまな層のための情報交換会や勉強会も開催され、地域の防災活動の活性化を支えています。

減災連携研究センターの発足

地域の産官学民の連携による減災活動をさらに明確に組織化するため、昨年12月に減災連携研究センターを立ち上げました。防災関連の教員が中心となり、学外からの客員教員や寄附講座も予定されています。東日本大震災発生後は、3月26日(土)、大震災追悼シンポジウムを開催、そして、環境総合館内に大震災情報集約拠点(MeDIC)を設置し、地域に向けて正確な災害情報の発信を目指しています。

東海・東南海・南海の巨大地震が近い将来に発生することが予想されます。東海から四国・九州に至る西日本の広域大震災に対して、地域で連携して減災対策を進めることが必須であり、本学は学内外の安全対策で足元を固め、地域を支える体制を整えています。



大震災情報集約拠点 (MeDIC)

医学部附属病院における東日本大震災への対応

去る3月11日に、東北地方太平洋沖で発生しました大地震と、それに関連した大津波及び原発事故により被災された多くの方々に対し、心よりお見舞い申し上げるとともに、犠牲になられた方々に深く哀悼の意を表します。

名古屋大学医学部附属病院では、大学本部に設置された「東日本大震災対策本部」の下に、医療支援等を担当する「東日本大震災医療支援対策本部」を立ち上げ、被災地の東北大学附属病院を通して、医療材料・衛生材料などの支援物資をいち早く届けるとともに、石巻地区、南三陸地区、福島地区などへの医療支援を行ってまいりました。

附属病院は、大震災以来、入院・外来ともに混乱なく通常の診療を行っておりますが、国、県、被災地などからの要請がある場合には、迅速な患者受け入れを行うこととしております。引き続き通院あるいは入院中の患者さんの治療に万全を期して対応するとともに、長期的展望に立った継続的な災害医療支援に取り組んでいきたいと考えております。

名古屋大学医学部附属病院長
東日本大震災医療支援対策本部長 松尾 清一

これまでの医療支援対策本部の取り組み

(4月22日現在)

医学部附属病院「東日本大震災医療支援対策本部」は、これまでに医療支援チームの派遣をはじめとする次のような支援活動を行っています。

<p>(1) 放射線測定チームの派遣 派遣者数 2名(放射線技師1名、事務1名) 派遣先 福島県 派遣期間 3月16日(水)～20日(日)</p> <p>(2) 医療支援チームの派遣 ①石巻地区 【第1陣】 派遣者数 8名(医師4名、看護師2名、薬剤師1名、事務1名) 派遣先 石巻赤十字病院 派遣期間 3月18日(金)～23日(水) 【第2陣】 派遣者数 8名(医師4名、看護師2名、薬剤師1名、事務1名) 派遣先 石巻赤十字病院 派遣期間 3月25日(金)～30日(水) 【第3陣】 派遣者数 7名(医師3名、看護師2名、薬剤師1名、事務1名) 派遣先 石巻赤十字病院 派遣期間 3月31日(木)～4月5日(火)</p>	<p>②志津川地区 【第1陣】 派遣者数 6名(医師2名、看護師2名、薬剤師1名、事務1名) 派遣先 志津川地区 派遣期間 4月5日(火)～4月10日(日) 【第2陣】 派遣者数 6名(医師2名、看護師2名、薬剤師1名、事務1名) 派遣先 志津川地区 派遣期間 4月15日(金)～4月20日(水)</p> <p>(3) 物資の輸送 3月16日(水)に、文部科学省から必要物資確保の協力依頼を受け、患者給食、医薬品及び医療材料等合わせて20トンの物資を自衛隊小牧基地から東北大学附属病院へ輸送しました。</p> <p>(4) 被災患者受入態勢について 3月17日(木)付で、院内の各診療科に対し、当院における被災患者受け入れについて通知を行い、被災患者を含む被災患者の受け入れ手順等の周知を行うなど、受入態勢を整えました。</p>
--	--

東日本大震災における医学附属病院の医療支援活動

【石巻医療支援第1陣として】

3月18日(金)より6日間、名古屋大学病院派遣チーム第1陣として石巻市へ出向したのは、私をリーダーとする8名だった。名古屋より約15時間かけて、2台のワンボックスカーで現地入りし、初日は石巻赤十字病院での診療、翌日より被災地を回り、避難所での診療活動を行った。

今回の震災は、震災や火災に加え、さまざまな報道の通り、津波による被害を基盤とするものだった。震災2日目まではボートでの救助、6日目からは市内より水が引き、被災者は自力脱出が可能になったという。現地調査では、被災地の学校校舎等は1階まで完全に破壊され、さらに湾岸では3階まで浸水しているところもあり、被災地の一部は高さ約50 mの津波に巻き込まれたことを確認した。被災地の路上には魚が転がり、腐敗臭が強く、咳き込む被災者が多く認められた。このような中で、当院は、同年4月5日(火)までの第2陣、第3陣の3班が、石巻市での現地支援診療を行った。

一方、今回の被災者の特徴は、身体的病態のみならず、精神面にも及んだ。老年者の中には1978年の宮城県沖地震を心的ストレスの1次インパクトとし、今回の東日本大震災を2次心的インパクトとして、急性ストレス反応として複雑な精神症状が認められた。さらに、統合失調症の患者には、服薬中断により、精神状態の増悪が認められた。このような理由により、いち早く精神科専門医を同行させた当医療支援チームは、極めて重要な役割を担った。

【災害医療における急性期と慢性期】

震災3月11日(金)から第10日を経過する過程で、医療形態は急性期医療より慢性期医療へ変化し、慢性期診療

と保健衛生対応へ移行した。

急性期10日までは、心肺停止、外傷、ショック、偶発性低体温症、溺水、肺炎などの緊急性の高い病態が中心となり、全402床の石巻赤十字病院では仮設増設ベッドを1階フロア等に配置し、さらにヘリコプターによる広域搬送を必要とした。一方、避難所では、被災者状況をしらみつぶしに評価する「ローラー作戦」が展開され、さらに処方されていた薬の紛失による再発行、感冒症状への対応、精神状態が管理された。主に、当院派遣チームの第1陣～第2陣は、この急性期診療を支援した。

このような状態より第12日を経過して、石巻市医師会の活動が再開されはじめ、慢性期診療に移行した。震災後の水道の再開が立ち後れることにより、被災者の多くは十分な手洗いができず、慢性期には嘔吐および下痢とする急性胃腸炎に罹患しやすい傾向があった。また、寒さなどによる活動性の低下より、深部静脈血栓症のリスクが高まり、慢性期とはいえども、病院搬送を必要とする被災者が確認されはじめた。

このように、急性期には集中治療施設への搬送のニーズが生じていたものの、慢性期には家を失い、帰る場所がない状態での一時的入院が必要な被災者診療が高まる傾向を認めた。災害などの緊急時における傷病者の慢性期の後方病床の整備については、今後、愛知県においても十分な検討課題と考えられる。

名古屋大学医学部附属病院では、石巻市への医療支援活動を3班まで行い、その後に南三陸町志津川へ3班を送り、宮城県沖への医療支援活動を展開した。さらに名古屋大学医学部附属病院では、いくつかの国立大学との連携の中で、石巻市への診療チーム派遣を継続しようとしている。被災地の1日も早い復興を祈念して止まない。

(医学部附属病院救急部・集中治療部長 松田直之)



避難所における診療風景 (3月20日 AM10:32撮影)



夜間の診療ミーティング (3月20日 PM8:43撮影)
松田直之 (救急・集中治療)、坪井直毅 (腎臓内科)、沼口敦 (小児科)、
田中聡 (精神科)、村岡勲 (薬剤部)、浅井陽次 (看護部)、
磯村義人 (看護部)、杉浦良幸 (事務)

“時空のトンネル” ワームホールの検証法

阿部 文雄 太陽地球環境研究所准教授

科学の本質は、その実証性にあります。ガリレオの時代には、大地が動くという事自体荒唐無稽といわれる様なことでした。しかし、その後多くの観測事実によって、地球が太陽の周りを公転していることはゆるぎの無い事実となっています。それでは、SF やアニメの世界にも登場するタイムトラベルや超光速移動は、荒唐無稽な空想上の産物で検証不能でしょうか？

時空上の離れた点の間を連結するワームホール(図1)は、1935年にアインシュタインとローゼンによって初めて導入されました(アインシュタイン・ローゼン・ブリッジと呼ばれる)。その後、何種類かのワームホールが導入されましたが、理論上の意味の無い解と考えられていました。しかし、1988年のモリスおよびソーンによる有名な論文により、ワームホールのうちある種のは人間が通過可能であることが証明されました。この結果、人間がワームホールをくぐり抜けて反対側に出ることにより、タイムトラベルや超光速移動が可能といった説も提唱され、カール・セーガン

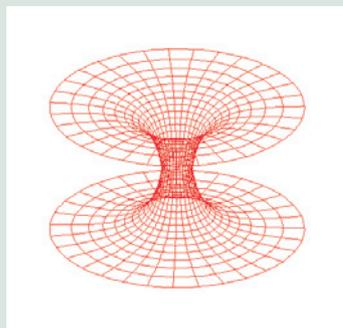


図1 ワームホールのイメージ図。上と下の時空は、宇宙の中の遠く離れた点、現在と過去、現在と未来、この宇宙と別な宇宙など、さまざまな可能性がある。

の「コンタクト」などのSF小説の題材にも取り上げられ、多くの理論的研究がなされました。しかし、こうしたものが実際に存在するかどうかに関しては、理論的には何ら制限が無く、実験・観測による検証は有効な手段がありませんでした。

ワームホールは、通常のアstronomical観測法を拒否しています。光も電波もX線も発しません。1995年クレマーたちは、ある種のワームホールは負の質量の重力レンズ効果を引き起こすと考え、この手法による探索法を提案いたしました。しかし、負の質量の根拠はあいまいで、実際にワームホールに当てはまるかどうか不明でした。最近になってワームホールの重力レンズ効果を理論的に計算する研究が進み、2008年の論文でデイとセンは通過可能なワームホールの一種であるエリス・ワームホールによる光線の曲げ角を導出いたしました。

重力レンズというと、ハッブル宇宙望遠鏡などで撮影された、歪んだ形の銀河やアーク(光り輝く円弧)を思い浮かべる方が多いと思います。しかし、これは遠方にある巨大な銀河や銀河団などで見られる重力レンズ効果であり、星などの小さな天体による重力レンズ効果では、直接歪んだイメージを捉えることはできません。しかし、こうした場合でも2つの星が視線上に並べば、手前の星の重力レンズ効果によって、遠方の星が明るく見えることがわかっており、実際にそうした増光現象が多数観測されています。

では、手前を通過するのが星ではなく、ワームホールだったらどうなるのでしょうか？ 実際に計算してみました。計算手法は、すでに星による重力レンズでは確立されたものがあるので、それを踏襲しました。結果は、図2の通りです。赤い線

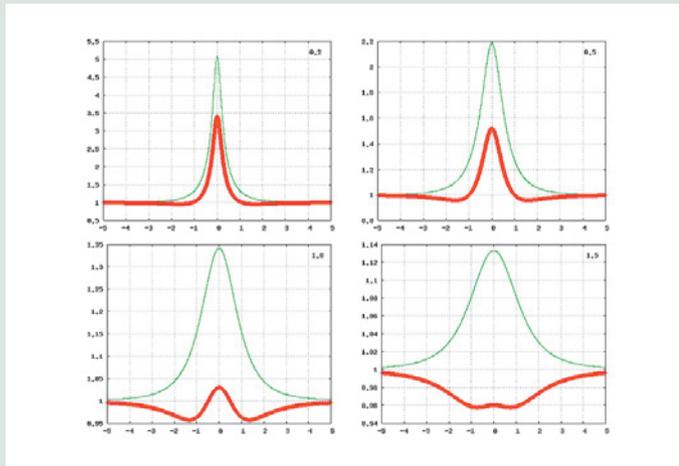


図2 重力レンズ効果による遠方の星の明るさの変化。縦軸は増光率、横軸は時間。赤線は、ワームホールによるレンズ効果、青線は星によるレンズ効果をあらわす。パネルの違いは、視線からワームホールが通過する場所までの距離の違いをあらわす。

は、ワームホールのレンズ効果による星の明るさの時間変化、青い線は星によるものです。明るさの変化は、通過する場所によって違いますが、ワームホールによるレンズ効果は、星に比べて増光が低めで、ピークの両側ではわずかに減光しています。星によるレンズ効果では、減光は決して起きないとされており、この性質を使えば、星とワームホールを区別して検出することが可能と考えられます。

では実際に探してみても、見つからなかった場合はどうなるのでしょうか？発見できなくても、それをもってこの世に存在しないと結論することはできません。では、徒労に終わるのでしょうか？ワームホールが多数存在すれば当然観測にかかるはずですが。それが見つからないということは、そ

の存在量の上限を求められるということになります。このことは、科学的に重要な成果と考えられます。

参考文献

1. Abe, F., ApJ 725, 787 (2010).
2. Einstein, A. and Rosen, N., Phys. Rev. 48, 73 (1935).
3. Morris, M.S., and Thorne, K.S., AmJPh 56, 395 (1988).
4. Cramer, J.G., et al., PRD 51, 3117 (1995).
5. Dey, T.K. and Sen, S., MPLA 23, 953 (2008).

1986年1月筑波大学大学院理学研究科修了、同大準研究員、高エネルギー物理学研究所助手、名古屋大学太陽地球環境研究所助教授を経て現職
趣味：登山

あべ ふみお



大学院生のための大学院共通外国語科目を開講

教養教育院

大学院生と教員等の外国語による学術論文の執筆能力、プレゼンテーション能力等を養成し、「名古屋大学から Nagoya University へ」の飛躍に資するために、平成22年4月、教養教育院に教養教育推進室ライティング支援部門が設置され、同年10月、その企画・立案・実施の中心的役割を担う3名の外国人教員を新たに迎え、本格的な活動がスタートしました。

部門の英語呼称は親しみやすさを込めた「Mei-Writing」とし、早速、英語・フランス語・ドイツ語の各チュートリアル実施に先立って、11月9日に、附属図書館2Fのラーニングコモンスで、『Writing is Thinking』をモットーとする、Mei-Writing方式チュートリアルのコンセプト説明会(ワークショップ)を開催しました。当日は100人以上の参加者が集まり、各チューターの自己紹介や質疑応答なども交え、説明会は盛況のうちに終わりました。

この3月末までの利用者へのアンケート調査によると、利用者の満足度は非常に高く、また、自由記載からも多くの好評価が得られており、Mei-Writingの今後の取り組みに対して大きな期待が寄せられているところです。

4月からは、さらに新たな外国人教員を加えて、以下のような大学院生のための大学院共通外国語科目が開講されています。投稿論文や学会発表などを控えて、しばしばせつば詰まった時の頼

Meidai Academic Writing Unit
Writing Is Thinking
名大初のライティング・ユニット
Pursuing Clarity & Coaxing Ideas In Writing

Mei-Writingの目的
 学術論文・投稿論文の書き方をサポートし、英語・フランス語・ドイツ語・中国語の各言語に比べて読者が理解しにくい点、留意点、留意点を...

Mei-Writingの特色
 ・個別指導による個別対応
 ・最新刊の参考書を使用した
 ・論文作成(作成法、レポート等)の支援

Services: (Free)
 • One-One Tutorials on dissertations, essays, reports, etc.
 • チュートリアル
 • Regular Courses on Academic Writing, Academic Presentation, etc.
 • 授業
 「アカデミック・プレゼンテーション」「アカデミック・ライティング」等の授業

Appointment
 Location: 5階 国際言語文化センター313号
 Phone / Fax: 052-747-6934
 Website: <http://www.meidai.nagoya-u.ac.jp/>

もしい助けとなるチュートリアルとは別に、「備えあれば憂いなし」と悠々と構え、毎週1回の授業を積み重ねて、学術論文の書き方、プレゼンテーションの仕方を基礎からじっくり身につける機会を提供するのが、これらの共通科目です。

	Course	Code	Professor	Day (hour)
English	Academic Writing I	A	Paul W.L. Lai	Tue. (3)
	Academic Writing I	B	Chad Nilep	Wed. (3)
	Presentation A		Mark Weeks	Tue. (5)
German	Academic Writing I	C	Markus Rude	Tue. (5)
French	Academic Writing I	D	Nicolas Baumert	Fri. (3)
Chinese	Academic Writing I	E	Jian Lu	Fri. (3)

また、毎週1回の授業参加が難しい学生のためには、2泊3日のサマーキャンプも企画されており、詳細が決定次第、HPに案内を掲載する予定です。

中部地域の研究重点大学である名古屋大学には、毎年、学部生とほぼ同数の大学院生が入・進学してきます。Mei-Writingの授業は、これらさまざまな分野で優れた研究をめざす大学院生に、どの学術分野にも共通する、論理的思考に基づく論の展開方法、各論文構成ユニットについての知識等を教授し、実践的訓練によって身につけさせることを目的としています。単なる語学力ではなく、論理的思考力の養成によって、より多くの論文が学術誌に掲載され、出版の機会をつかめるようにサポートすること、これがMei-Writingの仕事です。

まだ誕生してから間もないMei-Writingですが、今後は名古屋大学のライティング事業の拠点

として、学内の各関連機関とも連携し、その成果を広く国内外に発信していきたいと考えています。

Mei-Writingの活動の詳細については、ホームページ (<http://www.ilas.nagoya-u.ac.jp/AWU/Mei-Writing/Top/Top.html>) をご覧ください。



講義風景



講義風景

梶田 信
 エコトピア科学研究所講師

プラズマ材料相互作用の新展開

エコという言葉が世の中の至るところで見受けられますが、エネルギー問題解決の切り札となる技術として、太陽で起こっているような核融合反応を利用してエネルギーを取り出す核融合発電の研究が進められています。その検証実験のための国際プロジェクトとして、2006年よりフランスのカダラッシュにおいて国際熱核融合実験炉 ITER の建設が始まっております。

定常運転が可能な核融合炉を実現するためには、幾つかの技術的、物理的な課題が存在しますが、その課題の一つに、炉心から排出される膨大な熱とプラズマ粒子と壁の相互作用の問題が挙げられます。プラズマ対向材料（候補剤としてはタンゲステンや炭素が有望視されている）は太陽表面に匹敵する大きな熱・粒子負荷を受けることになり、その結果発生する著しい不純物の放出ならびにプラズマ対向材料の損耗は、核融合炉の性能や寿命に大きな影響を与えることになるからです。

通常核融合炉では、燃料として重水素やトリチウムを使いますが、核反応後にヘリウムが発生することになります。このヘリウムは、高熱流プラ

ズマと材料の相互作用の中でも、とりわけ奇妙な影響を与えることが分かってきました。ヘリウムは、金属（タンゲステン）の中の空孔（原子が抜けた穴のようなもの）と強く相互作用し取り込まれてしまうことが分かり、それらが、図1に示すようなロッド上のナノ構造を形成していくのです。この成長過程は実に不思議で、空孔同士が結合しヘリウムバブル（ヘリウムの泡のようなもの）を金属中につくり（図2）、それらが動きながら金属を変形させていくのです。

ナノ構造が出来てしまうと、材料の物性が大きく変化し、パルス的な熱負荷に対して、容易に表面が溶融したりアークが発生したりし、材料を損耗させてしまい、核融合炉内では悪影響を及ぼすことが分かってきています。一方で、ナノ構造化したタンゲステンは光の吸収率が可視領域から近赤外領域でほぼ100%と世界で最も黒い金属になっていることを見出し、次世代の太陽光発電とされている太陽光を用いた熱光起電力発電の吸収体やエミッターなど、様々な応用的な用途にも利用できる可能性が見出されてきています。

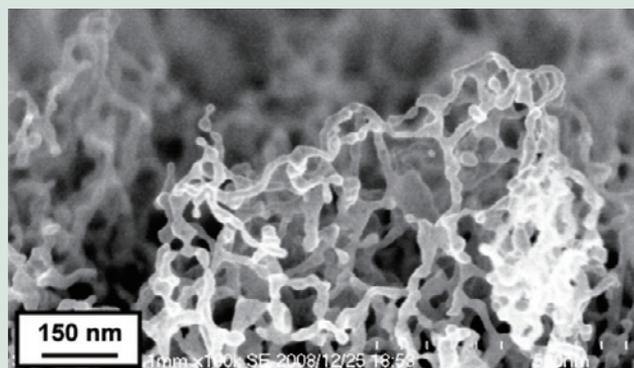


図1 ヘリウムプラズマ照射により形成されたタンゲステンナノ構造体のSEM（走査型電子顕微鏡）写真。ネットワーク状のタンゲステンが形成されていることが分かる。

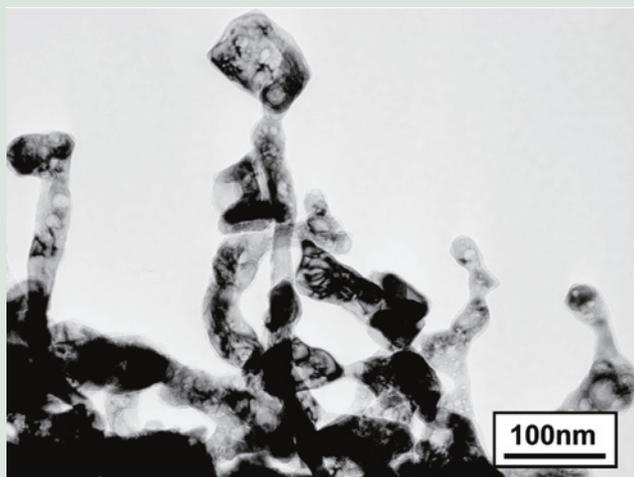


図2 ヘリウムプラズマ照射により形成されたタンゲステンナノ構造体のTEM（透過型電子顕微鏡）写真。ナノ構造体の内部にヘリウムバブルが多量に存在していることが分かる。（九州大学との共同研究により撮影）

減災連携研究センター大震災追悼シンポジウムを開催

●減災連携研究センター



パネリストの方々



会場の様子

減災連携研究センターは、3月26日(土)、IB電子情報館大講義室において、大震災追悼シンポジウム「大震災—これから何をすべきか?」を開催しました。当初は、昨年12月1日に発足した同センターの設立記念シンポジウムとして計画してきたものですが、今回の東日本での予期せぬ大震災の発生により、急遽、内容を変更して実施することになりました。

開会に先立ち、鈴木康弘環境学研究科附属地震火山・防災研究センター教授が同シンポジウムの開催趣旨を紹介し、その後、大震災で亡くなられた方を悼み全員で黙祷を捧げました。

開会の辞では、濱口総長が大震災について哀悼の意を表し、また、これから我々は何をすべきかについて問題提起をしました。

シンポジウム前半では、中野秀秋愛知県防災局長が愛知県の支援を説明し、自助・共助の力、広域連携、防災人材育成の重要性、そして基幹的広域防災拠点を中部にも作るべきことなど力説しました。その後、減災連携研究センターの教員が今回の大震災について現在わかっている状況と、各人の考えをそれぞれの専門から述べました。山口環境学研究科長は、仙台での被災体験から日頃の訓練や備えの必要性を話しました。松田直之医学系研究科教授は、3月24日(木)まで6日間行われた、石巻日本赤十字病院での名古屋大学救済派遣チームによる救援支援活動状況を紹介しました。水谷法美工学研究科教授は、過去の津波被災事例を挙げ、今回の津波によって引き起こされた事象について説明しました。山岡環境学研究科附属地震火山・防災研究センター長は、今回の地震のメカニズムと大規模な地殻変動が生じたことについて説明しました。護 雅史環境学研究科准教授は、今回の地震によって引き起こされた様々な被害

を阪神淡路大震災と比較しながら整理して紹介しました。

後半のパネルディスカッションは、福和伸夫環境学研究科教授をコーディネーターとし、金田義行独立行政法人海洋研究開発機構地震津波・防災研究プロジェクトリーダー、鈴木教授、野田利弘工学研究科教授、栗田暢之NPO法人レスキューストックヤード代表理事、隈本邦彦環境学研究科客員教授の5名のパネリストで行われました。

まず、パネリストそれぞれが今回の大震災で感じたこと、被災地の復興について述べました。そして、どのような支援・協力ができるかを討論しました。会場からの質問もいくつか紹介され、それに対応する形で貞観地震津波については、想定外というより未想定であり、想定外という用語の使い方には注意が必要であるとの意見がありました。また、工学、報道、NPOそれぞれの立場でのやるべきことが話されました。

次に、この東海地域、そして日本はどのようなことに取り組めばよいのかについて討論し、それぞれの立場で連携の重要性が話され、ゲストパネリストが減災連携研究センターへの期待を述べました。

最後に、減災連携研究センター長である藤井理事が、改めて今回の大震災被害について哀悼と当センターの役割を確認して閉会となりました。

今回のシンポジウムについて、中止や延期を視野に入れて連日検討し、その結果、今回の大震災においてなぜこれほどの被害が出てしまったかを真摯に考え、同様の大災害が近い将来に起こることが確実な地域に住む我々に「いったい何ができるか」、「何をすべきか」を考えることは、意義のあることではないかと思い開催に踏み切りました。当日の参加者は300名を越え、それぞれの立場で減災を考えるきっかけになったシンポジウムでした。

医学部動物慰霊祭を挙

●医学部

医学部は、3月17日(木)、実験動物供養碑前において、動物慰霊祭を執り行いました。

これは、医学の教育研究の発展に貢献した動物を慰霊するため行われたもので、まず、慰霊祭に先立ち、東日本大震災で亡くなられた方々に対して、参列者全員による黙禱が行われました。

慰霊祭では、祖父江医学部長から、「医学への貢献に対

し感謝の意を捧げるとともに、医学医療の進歩・発展及び医師・医学研究者の育成のために一層努力する」と慰霊のことばが述べられ、続いて、教職員及び学生が実験動物供養碑に献花をしてお参りしました。

教職員、学生ら約120名が参列し、実験動物の冥福をお祈りしました。

環境医学研究所動物慰霊祭を挙

●環境医学研究所



慰霊碑

環境医学研究所は、3月18日(金)、同研究所建物外の一面に設けられた慰霊碑において、動物慰霊祭を挙

行了。同研究所は、東山キャンパスで唯一のSPF実験動物飼育施設を有し、動物実験が研究推進の欠かせない方法となっています。

動物実験の実施に当たっては、動物実験委員会における実験計画内容の厳正な審査を経て、例年80件程度の実験が行われており、本学の研究に多大な成果をもたらしています。

慰霊祭では、日ごろ研究に供された実験動物に感謝するとともに、その霊を慰めるため慰霊碑に供花・供物を配し、宝珠院僧侶による読経が行われる中、参列した教職員、大学院生等50名余りが次々と焼香・合掌しました。

ICCAE 第5回オープンセミナーを開催

●農学国際教育協力研究センター



講演する浅井研究員

農学国際教育協力センター(ICCAE)は、3月23日(水)、2010年度第5回オープンセミナーを開催しました。

今回は、浅井英利 ICCAE 研究員が「ケニア西部高地における非生物的ストレス条件下での陸稲生産システムの開発」と題し、ケニアにおける稲作の概要を紹介するとともに、これまでに実施した現地圃場実験の結果に基づき、冷害や水ストレスなどの陸稲生産阻害要因が稲収量に及ぼす影響、近年開発されたNERICAのパフォーマンス評価、また、早ばつ条件での具現すべき根の形態的特性について報告しました。

浅井研究員は、ケニア西部のマセノ大学植物園に滞在し、ケニア西部高地に適した陸稲生産システムを開発すること目的として、多様な栽培環境と陸稲品種の相互作用メカニズムを解明する研究活動を行っています。

アフリカの農業や稲作に関心のある学生を始め、他大学からの参加もあり、盛況のうちに終了しました。

理学南館大講堂竣工式を挙

●大学院理学研究科

大学院理学研究科は、4月5日(火)、理学南館大講堂、通称「坂田・平田ホール」の竣工式を挙

行しました。濱口総長、藤井理事、渡辺副総長等本学関係者の出席のもとで行われた竣工式では、まず、國枝理学研究科長、総長、益川素粒子宇宙起源研究機構長から同ホールが完成した喜びと同ホールに寄せる期待を込めたあいさつがありま



記念撮影

した。

その後、理学南館の設計事務所の担当者とともに、館内の施設を見学しました。

「坂田・平田ホール」は、ノーベル賞受賞者の野依良治先生、益川敏英先生、小林 誠先生、下村 脩先生の師であり、偉大な指導者である坂田昌一先生と平田義正先生の名前を後世に残し、今後の研究者、学生にその意志を受け継ぐことを目的として命名されました。

1階には、固定式座席301席+車いす用スペース2カ所を擁する坂田・平田ホールの他、セミナー室、会議室、ポスター展示が可能なホール等があり、各種講演や学会等の開催が可能です。

博物館特別企画「恐竜たちがやってきた」第3弾を開催

●博物館

博物館は、1月11日(火)から3月31日(木)まで、同館展示室において、「恐竜たちがやってきたー化石から学ぶ過去の生物多様性ー」の第3弾を開催しました。

化石は通常、硬組織と呼ばれる骨や貝殻など鉱物化した組織しか残りませんが、ごくまれに軟組織が分解されずに化石として見つかることがあります。今回は、バージェス



展示されたレバノンの白亜紀の地層から産出した魚類化石

頁岩の化石群(カナダ、カンブリア紀)、澄江の化石群(中国、カンブリア紀)、メゾン・クリークの化石群(アメリカ、石炭紀)、ゾルンホーフェンの化石群(ジュラ紀、ドイツ)、サンタナ層の魚類化石群(ブラジル、白亜紀)、レバノンの魚類等化石群(白亜紀)のような世界各地のすばらしい保存状態の化石を展示しました。

また、2月12日(土)には、前田晴良京都大学大学院理学研究科准教授による「化石化のメカニズムを探る」と題した講演会を開催しました。前田准教授は、生物がどのように化石化するのにかんする業績を数多く発表しており、講演では、通常見られる環境や生態とは異なった場で、例外的な化石の保存状態が作られること、そしてそのような化石から逆に過去の「裏生態学」とでもいべき情報が得られることなどを紹介しました。

当日は多くの参加があり、参加者は最後まで熱心に講演に聴き入っていました。

ミクロの探検隊を開催

●博物館

博物館は、3月26日(土)、同館実験室及び野外観察園において、ミクロの探検隊「植物」を開催しました。日立ハイテクノロジーズの協力を得て行われ、抽選で選ばれた小・中学生を中心とする17名が参加しました。

まず、同館野外観察園で当日開花している約20種類の植物から好きなものを採集し、分類の大きな基準になる葉や



電子顕微鏡で花粉を観察する参加者

花のカタチやつき方、花びらやガクの数等を調べました。次に、博物館へ戻り実体顕微鏡で細部を観察した後、各自で採集した花の花粉を材料にして、電子顕微鏡試料作成を行いました。その後、博物館にある3台の走査型電子顕微鏡を各自で操作し、花粉の観察、撮影を行いました。

参加者は、一見、粉のように見える花粉でも電子顕微鏡を使うと種類により様々な形や大きさをしていることを知り、驚きとともに「もっと他の種類の花粉を見たい」、「花粉だけでなく他の部分も観察したい」等、興味が次々と湧いて来たようでした。

最後は各自が撮影した花粉の写真を発表し、花粉のポストカードを作成しました。

ボタニカルアート作品展を開催

●博物館

博物館は、1月11日(火)から2月5日(土)までを第1期、3月8日(火)から4月9日(土)までを第2期とし、同館展示室、同館野外観察園セミナーハウスにおいて、ボタニカルアート作品展を開催しました。また、2月7日(月)から3月4日(金)までの間、医学部附属病院リハビリ広場において、26点の作品を展示し、3会場で3,500名以上の

来場者がありました。

ボタニカルアートは、花びらやガクの数はもちろんのこと、虫食いの痕まで忠実に描く植物細密画で、美術品としてだけではなく、写真の発達した現在でも図鑑などにも用いられる博物画のひとつです。

第1期は、博物館友の会のボタニカルアートサークルの作品を中心とした展示で、2期は、ボタニカルアートサークルの東海林富子講師の作品60点を中心に、ボタニカルアートの歴史やボタニカルアートの技法などを組み入れた展示を行いました。来場者からは、「美しい物に接して心が洗われた」、「植物に対する愛情があふれている絵を見て感激した」などたくさんの感想が寄せられました。

今回は「講師の絵をそばに置きたい、お手本にしたい」という要望から、展示図録が発刊され、234冊が初めて有償配布されました。



展示を鑑賞する来場者

名古屋大学基金の状況報告

「名古屋大学基金」は、平成18年3月に本学の良き伝統を守りつつ、さらに活性化させ、生き生きとした教育・研究環境を作り、21世紀の社会を支える「勇気ある知識人」を輩出するための基盤整備として設立しました。

この基金の運用益で、下記の事業を行うことになっております。

- 国際交流事業
- 教育・研究環境整備事業
- 学生育英事業
- その他事業（産学連携、社会貢献活動等の支援）

寄附者芳名録

名古屋大学OB、企業、一般の方々等から名古屋大学基金へご協力をいただき感謝申し上げます。

今後ともより一層のご支援を賜りますようお願い申し上げます。

ここに感謝の意を込めてご芳名を五十音順に掲載させていただきます。

法人（第2期 平成22年1月～平成23年3月末）

愛三工業株式会社	様	日本特殊陶業株式会社	様
財団法人石田財団	様	日本アイ・ビー・エム株式会社	様
社団法人キタン会	様	株式会社ノリタケカンパニーリミテド	様
JEFホールディングス株式会社	様	株式会社日立製作所	様
中央設備エンジニアリング株式会社	様	有限会社ファンド・リタ	様
東海カーボン株式会社	様	富士通株式会社東海支社	様
公立学校共済組合 東海中央病院	様	三菱化学株式会社	様
株式会社東海メディカルプロダクツ	様	名大応化32年会	様
東山会（名古屋大学卒愛知県立学校教職員有志）	様	株式会社メイテツコム	様
名古屋大学情報文化学部・人間情報学研究所同窓会	様	矢作建設工業株式会社	様
名古屋大学男声合唱団同窓会	様	矢橋ホールディングス株式会社	様
名古屋鉄道株式会社	様	株式会社ローソン	様
鍋屋バイテック株式会社	様		

個人（第2期 平成22年1月～平成23年3月末）

青木輝行様	阿知波一生様	泉兼男様	稲吉克裕様	鷓高重三様
青島好秀様	熱田信貴様	磯貝康光様	井上修様	内堀眞史様
青山佳代様	安部晴夫様	市川真由美様	井上省一様	内山昭男様
青山恭子様	天野博基様	伊坪明様	井上直樹様	内山理様
青山稔夫様	安藤綾乃様	井手暢子様	今井さやか様	内山道明様
青山恭久様	安藤順一様	伊藤栄一様	井村徳太郎様	梅田太規様
青山裕子様	安藤宏人様	伊藤和弘様	入江宏様	梅原大祐様
赤崎勇様	飯田威夫様	伊藤一行様	入山正様	梅村知世様
赤澤隆宏様	家崎志のぶ様	伊藤憲一様	杵山博様	浦一彦様
赤根智子様	家田信吾様	伊藤功治様	岩上實様	瓜谷眞裕様
赤松芳和様	池崎正一様	伊藤喬廣様	岩崎正隆様	江口光次様
浅井陽次様	池戸初枝様	伊藤輝明様	岩島英勝様	江崎研司様
浅井義正様	池本仁也様	伊藤憲和様	岩田忠俊様	江野本裕二様
朝倉英一様	石井憲司様	伊藤秀夫様	岩原弘育様	遠藤照彦様
朝倉伸泰様	石井大道様	伊東弘美様	岩元蘭様	王徳様
朝倉恵様	石川和史様	伊藤美千代様	上野美明様	大石博樹様
浅野真弘様	石黒澄衛様	井戸田満様	植村和正様	大磯伸二様
味村興成様	石原尚様	稲垣茂幸様	植村真美様	大内征夫様
東貞男様	石原隆昌様	稲垣祐子様	宇於崎洋一様	大口貞雄様
安達健朗様	井嶋昭彦様	稲垣嘉男様	臼井資春様	大倉守彦様

大河内	英隆	教義	様	加藤	藤	史	征	様	古	嶋	正	敏	様	柴	垣	好	正	様	高	木	昭	様
大崎	隆正	義夫	様	加藤	藤	寿	樹	様	小	嶋	悦	子	様	柴	田	真	治	様	高	木	弘	様
太田	田	夫	様	加藤	藤	文	男	様	小	島	彰	二	様	柴	田	達	志	様	高	高	さと	様
太田	田	美	様	加藤	藤	麻	記	様	小	塚	朋	和	様	柴	田	真	紀	様	高	高	素	様
太田	田	彦	様	加藤	藤	淑	子	様	古	寺		蘭	様	柴	田	八	重	様	高	高	緑	様
太田	田	代	様	加藤	藤	祥	俱	様	後	藤	要	明	様	柴	島	津	淳	様	高	高	健	様
大竹	昌	志	様	加藤	藤	玲	子	様	後	藤	貞	明	様	嶋	本	直	之	様	高	高	淳	様
大塚	正	元	様	加藤	藤	山	裕	様	後	藤	昭	樹	様	清	水	沙	紀	様	高	高	勝	様
大友	泰	行	様	金	江	敏	史	様	後	藤	昌	弘	様	清	水	水	敏	様	高	高	加	様
大野	哲	靖	様	鎌	田	恭	子	様	後	藤	勇	治	様	清	水	水	宣	様	高	高	良	様
大場	かよ	子	様	上	谷	いづ	実	様	琴	谷	昇	平	様	清	水	善	英	様	高	高	義	様
大橋	昌	哉	様	神	谷	研	二	様	小	西	敦	之	様	周	積	新	宏	様	高	高	正	様
大平	美	保	様	神	谷	知	世	様	小	西	幸	己	様	将	上	英	彦	様	高	高	夕	様
大宮	孝	子	様	神	谷	麻	利	様	虹	釜	一	広	様	上	瀨	謙	一	様	高	高	光	様
大森	博	司	様	亀	ケ	谷	茂	様	小	林	一	清	様	白	尾	誠	二	様	高	高	本	様
大岡	健	一	様	亀	島	加	代	様	小	林	貞	文	様	白	髭	民	夫	様	高	高	市	様
岡崎	昭	子	様	河	井	博	徹	様	古	森	吉	一	様	新	見	俊	彰	様	高	高	竹	様
岡崎	恒	和	様	川	合	優	美	様	近	藤	俊	明	様	末	光	信	夫	様	高	高	竹	様
小笠	原	宏	様	川	上	紀	久	様	近	藤	美	枝	様	杉	浦	睦	美	様	高	高	武	様
岡田	部	衛	様	川	北	一	人	様	近	藤	義	直	様	杉	田	光	彦	様	高	高	竹	様
岡村	正	造	様	川	口	智	洋	様	近	藤	克	彦	様	杉	田	光	二	様	高	高	竹	様
岡本	敏	男	様	川	口	正	祥	様	坂	井	知	子	様	杉	田	雄	男	様	高	高	武	様
小川	哲	夫	様	河	島	道	夫	様	坂	倉	康	也	様	杉	山	孝	三	様	高	高	竹	様
小荻	原	美	様	河	地	龍	三	様	坂	下	克	己	様	杉	山	千	春	様	高	高	竹	様
奥田	一	夫	様	川	松	信	一	様	佐	久	貞	行	様	杉	山	裕	一	様	高	高	立	様
奥田	久	司	様	河	村	栄	夫	様	櫻	井	信	夫	様	杉	山	昌	正	様	高	高	立	様
奥村	純	市	様	河	田	惠	司	様	佐	々	木	邦	様	鈴	木	正	彦	様	高	高	立	様
尾崎	弘	行	様	川	澤	奈	美	様	佐	々	木	奈	様	鈴	木	真	一	様	高	高	田	様
小沢	晃	一	様	木	折	洋	太	様	佐	々	木	保	様	鈴	木	孝	繁	様	高	高	田	様
小尾	関	秀	様	北	川	量	三	様	佐	藤	邦	德	様	鈴	木	千	惠	様	高	高	田	様
尾関	知	正	様	北	澤	義	之	様	佐	藤	桂	子	様	鈴	木	規	生	様	高	高	田	様
小田	康	生	様	木	戸	誠	一	様	佐	藤	憲	史	様	鈴	木	久	則	様	高	高	田	様
小野	伊	八	様	木	下	誠	子	様	佐	藤	浩	一	様	鈴	木	秀	夫	様	高	高	棚	様
貝沼	篤	子	様	木	村	明	秋	様	佐	藤	重	明	様	鈴	木	正	男	様	高	高	棚	様
加賀	周	作	様	楠	元	好	也	様	佐	藤	晴	信	様	鈴	木	真	人	様	高	高	谷	様
影山	康	夫	様	久	野	通	な	様	佐	藤	ひ	と	様	鈴	木	三	栄	様	高	高	田	様
梶野	雅	司	様	久	保	佳	基	様	佐	藤	廣	一	様	鈴	木	康	夫	様	高	高	玉	様
鹿嶋	伸	彦	様	久	熊	井	聡	様	佐	藤	正	実	様	須	藤	憲	三	様	高	高	多	様
数田	憲	治	様	熊	谷	秀	司	様	佐	野	立	明	様	須	藤	涉	一	様	高	高	多	様
片岡	貴	晴	様	熊	澤	信	夫	様	佐	野	知	江	様	澄	川	千	賀	様	高	高	唐	様
片山	貴	晴	様	栗	林	正	博	様	佐	分	孝	一	様	瀨	川	吉	夫	様	高	高	茶	様
加藤	織	里	様	栗	本	一	亮	様	澤	野	広	子	様	関	森	俊	幸	様	高	高	中	様
加藤	寛	治	様	黒	川	俊	和	様	澤	井	洋	介	様	関	古	邦	美	様	高	高	張	様
加藤	隆	子	様	計	馬	圭	一	様	塩	井	哲	夫	様	瀨	古	竜	也	様	高	高	張	様
加藤	直	彦	様	幸	村	圭	彦	様	鹿	野	優	早	様	瀨	副	松	一	様	高	高	塚	様
加藤	信	彦	様	神	山	利	彦	様	茂	内	茂	早	様	副	側	島	洋	子	高	高	塚	様
加藤	信	彦	様	小	木	曾	雄	様	茂	内	茂	早	様	側	島	洋	子	高	高	塚	様	

名大基金にご寄附いただいた方々

柘植 正見 様	永長 津弘 様	服部 修幸 様	正岡 久和 様	森 征一郎 様
柘植 正慶 様	長中 西弘 様	服部 宜子 様	増田 晃一 様	森 靖弘 様
辻本 康夫 様	中野 幹勝 様	服部 祐介 様	間瀬 喜木 様	森 田耕子 様
辻本 悦夫 様	中野 裕也 様	濱口 俊夫 様	松岡 菜穂美 様	森 田裕二 様
土田 栄一 様	中野 恭二 様	濱口 田健太郎 様	松岡 光恵子 様	柳 生裕二 様
筒井 宣登 様	中野 村啓子 様	早川 章友 様	松崎 規子 様	安井 昭正 様
堤井 清美 様	中野 村みゆき 様	林 郁男 様	松田 孝志 様	屋富 祖充 様
坪口 郁雄 様	中野 村元俊 様	林 美津子 様	松永 佳世子 様	柳 澤田寛 様
出口 智典 様	中野 村嘉都美 様	林 義昌 様	松原 礼志 様	柳 原寛治 様
出口 弥寿雄 様	永家 山秀人 様	津田 誠治 様	松本 佐恵子 様	柳 瀬仁茂 様
出口 綾子 様	中山 倉元 様	伴野 純代 様	松本 周治 様	柳 野武肇 様
手塚 百二子 様	浪打 十枝子 様	樋口 晴一 様	松本 匡裕 様	山内 邦泰 様
寺田 喜久夫 様	成瀬 實幸 様	彦坂 田利江 様	松本 雅有 様	山内 恵子 様
寺田 八重子 様	新西 井康三 様	菱田 恵美子 様	三浦 昌一 様	山内 良子 様
寺西 美穂 様	西子 利弥 様	日比野 真美子 様	三浦 深志 様	山口 弘子 様
寺本 健彦 様	西島 憲幸 様	姫野 多津男 様	水田 深珠 様	山口 正裕 様
土井 敏彦 様	西塚 晴生 様	平野 友也 様	水田 野勝博 様	山口 善久 様
徳川 隆春 様	西村 弘行 様	廣瀬 佳朗 様	水野 野公則 様	山越 浩一 様
徳富 田美知雄 様	西村 巨佳 様	深谷 智博 様	水野 野艶子 様	山下 富江 様
富高 永尚 様	西脇 清治 様	福井 康洋 様	水野 野容子 様	山下 守弘 様
富山 一隆 様	西脇 重徳 様	福田 良清 様	溝井 文子 様	山田 里美 様
外山 弘光 様	野田 弘実 様	藤井 敬介 様	御手洗 亜紀子 様	山田 朋子 様
外山 居修 様	野々川 ひとみ 様	藤澤 謹司 様	三宅 謙作 様	山田 直博 様
外山 居昌 様	野々村 梨紗 様	藤丸 隆志 様	宮崎 直美 様	山中 広明 様
鳥居 和之 様	延山 信友 様	藤本 康彦 様	宮田 和明 様	山本 一良 様
内藤 雅嗣 様	野村 恵美里 様	星川 昌信 様	宮野 浩治 様	山本 順之祐 様
中井 貴美代 様	橋本 志孝 様	星野 裕香 様	宮原 智之 様	山本 俊彦 様
永井 浩美 様	橋本 孝保 様	堀田 哲容 様	三輪 会里 様	山本 昇登 様
永江 由梨乃 様	橋本 征行 様	堀内 江明 様	向井 三男 様	山本 秀文 様
長尾 征亮 様	長谷川 純一 様	堀尾 文彦 様	向尾 藤達 様	山本 浩史 様
長澤 亮雄 様	長谷川 哲也 様	堀本 多慶 様	村上 瀬保 様	山本 光夫 様
中嶋 一哉 様	長谷川 仁南 様	堀本 田弘美 様	村田 静昭 様	山本 野光 様
中嶋 吉芳 様	畑島 達志 様	前田 弘美 様	望月 原平 様	湯野 純嘉 様
永田 昌久 様	蜂須賀 碩知 様	前田 美果 様	望月 原平 様	楊 純 様
永谷 則子 様				楊 靖 様

名大基金にご寄附いただいた方々

與 語 雅 樹 様	吉 井 才 司 様	吉 田 宏 様	若 園 尚 美 様	渡 邊 八 郎 様
横 井 徹 様	吉 井 由 利 様	吉 田 雅 人 様	若 林 と も 様	渡 邊 三 一 様
横 井 正 男 様	吉 川 英 俊 様	吉 田 恭 信 様	鷺 津 敏 一 様	渡 邊 康 彦 様
横 井 三 男 様	吉 田 淳 様	吉 仲 崇 様	鷺 見 弘 様	渡 邊 芳 人 様
横 内 寛 様	吉 田 英 治 様	吉 村 隆 様	和 田 篤 佳 様	和 地 勉 様
横 山 しのぶ 様	吉 田 茂 生 様	吉 村 元 晴 様	和 田 孔 一 様	
横 山 實 様	吉 田 豪 様	米 津 友 子 様	和 田 信 雄 様	
横 山 恵 様	吉 田 秀 代 様	若 木 利 子 様	渡 邊 圭 祐 様	

名古屋大学基金へのご寄附をお願い申し上げます。

ご寄附は、1口 10,000円からお受けしています。

ご寄附については、所得控除等の税法上の優遇措置がございます。

詳しくは、ホームページ (<http://www.nagoya-u.ac.jp/kikin/>) をご覧ください。

問い合わせ先

総務部総務課（基金推進室）

Tel 052-789-4993、2011

Eメール kikin@post.jimu.nagoya-u.ac.jp

新名誉教授のことば

原文の通り掲載しています。



名大病院での31年

中尾 昭公 大学院医学系研究科教授

昭和42年に名古屋大学医学部入学、昭和48年に卒業し、二つの病院での臨床修練を経て昭和55年に第二外科に帰局しました。そして31年が経過し、定年までに1年を残して本年度で退職させていただきました。帰局から31年間、名大病院では大変お世話になりました。

大学の法人化も経験し、帰局当時と比較すると臨床や研究も様変わりしました。門脈カテーテルバイパス法を開発し、脾臓手術における門脈合併切除は安全な手術となりました。また各種の脾切除術式も考案し広く国内外で採用されるに至っています。脾臓切除は本邦現職教授のなかで最も多くを経験できましたし門脈切除は世界一の症例数となりました。消化器外科1と消化器外科2を合算した肝・胆道・脾臓手術症例数は名大病院が全国第一位となっております。そして平成10年を最後に消化器外科2では脾切除例の直死例を経験していません。我々外科スタッフの努力のみでなく名大病院の多くの人々のご支援とご協力があったのこのとど感謝いたしております。

すべての建物が一新され、さらにこれからの飛躍が期待される時に名大病院を去るのは少し寂しい気もしましたが4月よりはJR東海の名古屋セントラル病院へ赴任し、一外科医として再出発しております。私が学友会の時報部長時代に学友の有志の方々よりご寄附をいただき平成14年～17年にかけてJR鶴舞駅から名工大へ至るツツジの植え込みのなかに植樹した桜並木23本に名大病院のさらなる発展を託して退職させていただきます。



制御応用40年

大熊 繁 大学院工学研究科教授

私は、昭和52年4月に名古屋大学助手に着任し、講師、助教授を経て、平成2年12月に教授に就任して、この3月に34年間にわたりお世話になりました名古屋大学を退職致しました。この間、恩師の先生を始めとして、多くの方々にお世話になりました。心より感謝申し上げます。

私の専門は制御応用で、アクチュエータ、ハイブリッド・電気自動車、及びロボットなどへの制御理論の応用を研究してきました。特に、これらの駆動に必要なモータ制御とモータに電力を供給する電力変換器に力を入れてきました。次に、運動制御では、ロボット制御系について研究を進め、さらに人間的な制御として、遺伝的アルゴリズム、ニューラルネット、及びファジイを用いたインテリジェントシステムに研究を展開してゆきました。企業の技術者と協力して研究を進めることにより、実用化に至った技術は数多くあり、工学研究者としての喜びを味わうことができました。これらの研究活動を通して、多くの博士号取得者

を産業界、学術界に輩出することができたことも、私の喜びであります。

この3月11日に、東日本大震災が起きました。日本は、地震と津波、さらに原子力発電所の事故による災害からの、国を挙げての復旧・復興作業に入っております。これまでの当たり前前の生活に感謝するとともに、新しい社会のあり方を模索する時がきたと思います。社会に情報発信する大学の役割が重要になってゆきます。その中で、ものづくりの地にある名古屋大学の果たすべき役割は大きいと思います。

名古屋大学の益々のご発展を祈念致します。



豊田工業高等専門学校に移って

高井 吉明 大学院工学研究科教授

昭和42年に名古屋大学工学部電気工学科に入学、その後同学科助手として採用され、平成23年3月末にエネルギー理工学専攻教授として早期退職するまで44年という永きにわたり、名古屋大学にはお世話になりました。この間、高分子絶縁材料の電子的特性に関する研究、高温超伝導材料に関する研究などを行ってきました。

名古屋大学において、高井の名前はご存じなくても、3重駐車も日常茶飯事という超過密駐車状態を改善するため、有料制自動車入出構システムを作った張本人の一人といえば、お判り頂けると思います。

さて、4月より豊田工業高等専門学校に移り、いきなり入学式という校長としての初仕事も無事、高専教職員のサポートによって執り行うことができました。豊田高専は本科と専攻科の学生、合計約1200名を教育しており、その約半数が学生寮で生活しています。大学とは違って、学校生活もさまざまな場面において高学年が低学年生の面倒を見る事が多く、学生の自主

的活動が顕著です。15歳から22歳までの広がりを持った年齢層の学生が一緒に暮らすという独特な環境において、校長という未体験の仕事に戸惑いながら奮闘している毎日です。

本校と名古屋大学とは創設当時から密接な関係にありますので、今後も名古屋大学の皆様には温かいご支援をお願いすると共に、名古屋大学のますますのご発展を心より祈念します。



黎明期の植物分子生物学

中村 研三 大学院生命農学研究科教授

1983年より助教授として、1992年よりは教授として、28年間務めた名古屋大学を、定年の1年前に退職することになりました。名古屋大学では、学生時代の10年間を含め、自由闊達な雰囲気の中で多くの素晴らしい先輩、同僚、学友、学生に恵まれ、様々の新しいことにチャレンジする機会が得られ、感謝の念で一杯です。

植物と大腸菌の生体膜の生化学を学んで学位を取得した後、留学先のニューヨークの研究室で、始まったばかりの遺伝子クローニングを導入することを任されて遺伝子の世界に飛び込みました。しばらく五里霧中の中で求不得苦を味わった分、多くの最先端の研究法を身につけることができ、その後は次々と新しい研究に挑戦する醍醐味を味わいました。農学部に赴任してからは、サツマイモの高い栄養貯蔵能に着目し、細胞生物学的課題と個体レベルでみた遺伝子発現制御の研究を始めました。植物の遺伝子組換えが始まったばかりの植物分子生物学の黎明期、植物に強い名古屋大学

の恵まれた環境のもとで、志を同じくする仲間たちと新分野に挑戦するエキサイティングな時期を過ごすことができたのは幸いでした。その後、研究はシロイヌナズナ遺伝学を使い、対象も種子の油脂貯蔵へと大きくシフトしました。この4月から中部大学応用生物学部に移っても、生命農学研究科のモットーである「農学のフロントランナー」たらんとする気持ちは持ち続けていきたいと思っています。



次への出発点にたって

水村 和枝 環境医学研究所教授

研究にはいろいろ偶然的要素がある。良い院生・共同研究者に会う、良いテーマ・発見に会う、など。私にはそれが随分遅く、10年前ぐらいに起こった。現在もその面白さに引きずられて走っている最中である。そしてさらに研究を続けうるチャンスをつかむために、定年年齢の1年延長を辞して、元からの63歳で退職することにした（それでもかなりのペースダウンは余儀なくされそうである）。というわけで、名誉教授という大成した教授にふさわしい称号に戸惑っているところである。

研究テーマは痛みの末梢神経機構、中でもこの10年は筋性疼痛を対象としている。痛みはどの器官でも同じと考えている研究者が多いが、筋性疼痛は皮膚の痛みとはずいぶんメカニズム的に異なる。私たちが見出した、筋がその機能である収縮をする過程で痛みをおこす物質を産生し、遅発性筋痛を起こすことなどもその一つである。また、歴史的に筋の痛みの研究は医学部の対象とされてこなかった変な経緯があり、筋性疼

痛研究の遅れの基になっていることがわかってきた。気象変化による慢性疼痛増悪の機構についての研究をそれと平行してやってきた。これは環境医学研究所でなければできない研究である。

医学進学課程に入学して以来、約2年のドイツ留学を挟んで計45年もの長きにわたって名古屋大学にお世話になった。感謝します。

名大を表敬訪問された方々 [平成23年1月16日～平成23年4月15日]

日付	国/地域	訪問者	目的
1月26日	インド	ネル・グラム・パハラティ大学よりミシユラ副総長	表敬あいさつ及び学術交流についての意見交換
2月21日	中国	中国科学院より施副院長ほか4名	表敬あいさつ及び学術交流についての意見交換
3月10日	サウジアラビア	サウジアラビア大使館よりアデル国際交流課マネージャーほか1名	表敬あいさつ、本学概要説明。大学院工学研究科、大学院生命農学研究科及び大学院医学系研究科との学術交流と留学受け入れについて意見交換。医学部附属病院視察。
3月14日	スイス	スイス連邦工科大学チューリッヒ校よりリチャード名誉教授	G-COEノーベル賞受賞者講演会のため来学、表敬あいさつ
3月14日、3月17日	ベトナム	貿易大学よりホアン学長ほか1名	表敬あいさつ及び学術交流についての意見交換
3月31日	ベトナム	ハノイ工科大学よりレ講師ほか1名	表敬あいさつ及び学術交流についての意見交換

新たに締結した学術交流協定 [平成23年1月16日～平成23年4月15日]

大学間学術交流協定

締結日	地域/国名	大学/研究機関名
1月10日	スウェーデン	スウェーデン王立工科大学

構成員を対象とした研修 [平成23年1月16日～平成23年4月15日]

実施日	研修名	目的	参加人数
2月9日	第65回特許基礎セミナー	研究成果を特許出願するための知識の習得を目的とする。対象は、特許出願が未経験で、今後出願したい、特許出願に興味を持っている、あるいは出願経験はあるが再確認をしたい教職員、研究者、大学院生等。	5名
2月23日～3月9日	診療報酬説明会（看護部向け）	保険医療機関（臨床研修病院）として、保険診療に関するルールの周知徹底及び知識向上を目的とする。	270名 (全13回)
2月24日	第3回特許中級セミナー	研究成果を特許査定するための知識の習得を目的とする。対象は、特許出願経験があり、権利化をしたいと考える名古屋大学の教職員・研究者。	13名
3月9日	教員向けのセクシャル・ハラスメント防止研修	教員を対象に、セクシャル・ハラスメントの定義等を確認し、加害者、被害者にならないようにすることを目的とする。	35名
3月9日～3月11日	診療報酬説明会（診療科受付職員向け）	保険医療機関（臨床研修病院）として、保険診療に関するルールの周知徹底及び知識向上を目的とする。	33名 (全3回)
3月22日	教員・大学院生向けセクシャル・ハラスメント防止研修	主として大学院生を対象に、セクシャル・ハラスメントの定義等を確認し、被害者にならないようにすることを目的とする。	45名
4月8日	研究マネジメントセミナー2011「研究グループを率いるために」	研究グループリーダー経験3年未満の本学教員を対象に研究マネジメントの基礎知識・スキルを確認しながら想定される課題への対応を考える。研究グループのリーダーとなる日に備えることを目的とする。	30名
4月11日～5月24日	診療報酬説明会（医師向け）	保険医療機関（臨床研修病院）として、保険診療に関するルールの周知徹底及び知識向上を目的とする。	500名予定 (全31回)

新任部局長等の紹介

●環境学研究科長

溝口 常俊
(みぞぐち つねとし)

専門分野：地理学
(略歴)

昭和56年4月 名古屋大学文学部助手
昭和58年4月 富山大学教養部助教授
平成5年4月 富山大学人文学部教授
平成8年10月 名古屋大学文学部教授
平成12年4月 名古屋大学大学院文学研究科教授
平成13年4月 名古屋大学大学院環境学研究科教授
平成23年4月 名古屋大学大学院環境学研究科長



●発達心理精神科学教育研究センター長

松本 真理子
(まつもと まりこ)

専門分野：臨床心理学
(略歴)

昭和54年4月 刈谷病院心理士
昭和59年4月 浜松医科大学医学部臨床心理士
平成元年4月 浜松衛生短期大学教員
平成5年4月 聖隷クリストファー看護大学教員
平成13年4月 金城学院大学教員
平成20年4月 名古屋大学発達心理精神科学教育研究センター教授
平成23年4月 名古屋大学発達心理精神科学教育研究センター長



●地球水循環研究センター長

中村 健治
(なかむら けんじ)

専門分野：気象学
(略歴)

昭和52年4月 電波研究所郵政技官
昭和57年7月 電波研究所鹿島支店主任研究官
昭和63年4月 通信総合研究所主任研究官
平成2年7月 通信総合研究所関東支所第1宇宙通信研究室長
平成6年4月 名古屋大学水圏科学研究所附属共同研究観測プロジェクトセンター教授
平成12年4月 名古屋大学水圏科学研究所附属共同研究観測プロジェクトセンター長
平成13年4月 名古屋大学地球水循環研究センター長(平成17年3月まで)
平成23年4月 名古屋大学地球水循環研究センター長



●生物機能開発利用研究センター長

川北 一人
(かわきた かずひと)

(略歴)

昭和60年5月 社団法人北里研究所研究員
昭和61年4月 北里大学薬学部助手
平成2年4月 名古屋大学農学部助手
平成9年4月 名古屋大学農学部助教授
平成11年4月 名古屋大学大学院生命農学研究科助教授
平成18年6月 名古屋大学大学院生命農学研究科教授
平成23年5月 名古屋大学生物機能開発利用研究センター長



●留学生センター長

町田 健
(まちだ けん)

専門分野：言語学
(略歴)

昭和61年4月 東京大学文学部助手
平成元年11月 愛知教育大学教育学部助教授
平成4年4月 成城大学芸学部助教授
平成8年4月 北海道大学文学部助教授
平成10年4月 名古屋大学文学部教授
平成12年4月 名古屋大学大学院文学研究科教授
平成18年4月 名古屋大学大学院文学研究科長
平成20年4月 名古屋大学評議員
平成23年4月 名古屋大学留学生センター長



●研究協力部長

横山 正樹
(よこやま まさき)

(略歴)

昭和56年4月 豊橋技術科学大学教務部学生課
昭和59年6月 文部省初等中等教育局財務課
平成2年4月 文部省教育助成局海外子女教育課教職員給与係長
平成8年4月 岡崎国立共同研究機構総務部庶務課長
平成10年4月 国立教育会館研修総務課長
平成13年4月 文部科学省研究振興局情報課学術基盤整備室長補佐
平成16年4月 文部科学省初等中等教育局特別支援教育課課長補佐
平成18年4月 兵庫教育大学教育研究支援部長
平成20年4月 岐阜大学企画部長
平成23年4月 名古屋大学研究協力部長



新任部局長等の紹介

●附属図書館事務部長

加藤 信哉
(かとう しんや)

〈略歴〉

昭和51年4月 筑波大学図書館部運用課
昭和56年4月 秋田大学附属図書館閲覧係
昭和58年4月 図書館情報大学図書館情報課
昭和62年1月 図書館情報大学図書館情報課情報資料係長
平成4年4月 東京大学附属図書館情報サービス課開架閲覧係長
平成10年4月 東京大学附属図書館情報サービス課運用主任
平成11年4月 名古屋大学附属図書館情報システム課図書館専門員
平成12年4月 名古屋大学附属図書館情報管理課課長補佐
平成14年4月 熊本大学附属図書館情報サービス課長
平成16年4月 山形大学附属図書館情報管理課長
平成18年7月 山形大学学術情報部学術情報ユニット長
平成19年4月 東北大学附属図書館総務課長
平成23年4月 名古屋大学附属図書館事務部長



●工学部・工学研究科事務部長

藤井 昭彦
(ふじい あきひこ)

〈略歴〉

昭和51年4月 名古屋大学教養部
平成元年4月 岡崎国立共同研究機構総務部庶務課文書法規係主任
平成5年4月 核融合科学研究所管理部庶務課文書法規係長
平成9年4月 名古屋大学総務部研究協力課研究協力総務掛長
平成15年4月 名古屋大学総務部総務課専門員
平成17年4月 名古屋大学秘書室長
平成18年4月 名古屋大学医学部・医学系研究科総務課課長補佐
平成18年10月 名古屋大学医学部・医学系研究科総務課人事労務主幹
平成22年4月 名古屋大学工学部・工学研究科総務課長
平成23年4月 名古屋大学工学部・工学研究科事務部長



●文系事務部長

土井 悟
(どい さとる)

〈略歴〉

昭和46年6月 名古屋大学理学部
平成2年5月 名古屋大学医学部附属病院管理課主任
平成6年7月 大蔵省東海財務局管財部管理官
平成8年7月 名古屋大学経理部管財課第二管財掛長
平成15年4月 名古屋大学経理部主計課専門員
平成17年4月 名古屋大学財務部財務課課長補佐
平成18年10月 名古屋大学財務部財務課財務調整主幹
平成19年4月 名古屋大学文系経理課長
平成22年4月 名古屋大学財務部契約課長
平成23年4月 名古屋大学文系事務部長



●研究所事務部長

谷口 哲也
(たにぐち てつや)

〈略歴〉

昭和46年3月 名古屋大学医学部附属病院業務課
平成2年5月 名古屋大学理学部用度掛主任
平成7年4月 名古屋大学医学部附属病院医事課専門職員
平成9年4月 名古屋大学経理部経理課給与経理掛長
平成12年4月 岡崎国立共同研究機構経理部主計課総務係長
平成15年4月 名古屋大学経理部主計課専門員
平成17年4月 名古屋大学医学部・医学系研究科管理課課長補佐
平成18年4月 名古屋大学医学部・医学系研究科経営企画課長
平成20年4月 名古屋大学財務部経理・資産管理課長
平成22年1月 名古屋大学環境学研究科・地球水循環センター事務長
平成23年4月 名古屋大学研究所事務部長



役員等

総長	濱口 道成
理事（産学官・社会連携・国際学生交流関係担当）・副総長	宮田 隆司
理事（広報・法務・リスク管理・大学間連携関係担当）・副総長	佐分 晴夫
理事（総務・入試・学生支援関係担当）・副総長	杉山 寛行
理事（教育・情報関係担当）・副総長	山本 一良
理事（公正研究・施設設備・環境安全・人権関係担当）・副総長	藤井 良一
理事（財務・人事労務・事務総括関係担当）・事務局長	高橋 誠
理事（産学連携関係担当（関東地区担当））	横田 昭（学外） [†]
副総長（病院経営関係担当）	松尾 清一
副総長（研究・国際企画関係担当）	渡辺 芳人

副総長（評価・総合企画関係担当）	松下 裕秀
監事	青木 輝行（学外）
監事	浅野 良裕（学外） [†]
参与	金田 新（学外） [†]
参与	中村 利雄（学外） [†]
参与	山田 直（学外） [†]
参与	林 光佑（学外） [†]
参与	伊藤 勝基（学外） [†]
参与	出村 祥雄（学外） [†]
参与	片岡 大造（学外） [†]

†印は非常勤

経営協議会委員

学外委員

トヨタ自動車株式会社代表取締役副社長	内山田竹志
学習院大学経済学部教授	奥村 洋彦
中部電力株式会社相談役	川口 文夫
大学共同利用機関法人情報・システム研究機構理事	郷 通子
株式会社中日ドラゴンズ代表取締役社長	坂井 克彦
東レ株式会社代表取締役会長	榊原 定征
愛知県立大学長	佐々木雄太
日本ガイシ株式会社取締役相談役	柴田 昌治
愛知県病院事業庁長（愛知県がんセンター総長）	二村 雄次
日本アイ・ピー・エム株式会社代表取締役社長	橋本 孝之

(五十音順)

学内委員

総長	濱口 道成
理事	宮田 隆司
理事	佐分 晴夫
理事	杉山 寛行
理事	山本 一良
理事	藤井 良一
理事	高橋 誠
副総長・医学部附属病院長	松尾 清一
副総長	渡辺 芳人
副総長	松下 裕秀

教育研究評議会評議員

総長	濱口 道成
理事	佐分 晴夫
理事	杉山 寛行
理事	藤井 良一
文学研究科長	羽賀 祥二
教育発達科学研究科長	早川 操
法学研究科長	鮎京 正訓
経済学研究科長	多和田 眞
情報文化学部長	川口 潤
理学研究科長	國枝 秀世
医学系研究科長	祖父江 元
工学研究科長	鈴置 保雄
生命農学研究科長	服部 重昭
国際開発研究科長	成田 克史
多元数理科学研究科長	木村 芳文
国際言語文化研究科長	前野みち子
環境学研究科長	溝口 常俊
情報科学研究科長	大西 昇
環境医学研究所長	村田 善晴
太陽地球環境研究所長	松見 豊
エコトピア科学研究所長	高井 治
附属図書館長	松浦 好治

医学部附属病院長	松尾 清一
総合保健体育科学センター長	池上 康男
文学研究科	周藤 芳幸
教育発達科学研究科	金井 篤子
法学研究科	小畑 郁
経済学研究科	木村 彰吾
理学研究科	松本 邦弘
医学系研究科	榊原 久孝
工学研究科	西山 久雄
生命農学研究科	前島 正義
国際開発研究科	藤川 清史
多元数理科学研究科	菅野 浩明
国際言語文化研究科	藤井たぎる
環境学研究科	渡邊誠一郎
情報科学研究科	坂部 俊樹
教育研究共同施設連合選出	町田 健
教育研究共同施設連合選出	伊藤 義人
教育研究評議会選出	和田 壽弘
教育研究評議会選出	植田 健男
教育研究評議会選出	小野 耕二
教育研究評議会選出	高橋 雅英

総長補佐

産学官連携担当、研究推進担当	馬場 嘉信
産学官連携担当	水野 正明
社会連携・社会貢献担当	家森 信善
法務担当	本間 靖規
創薬科学担当	門松 健治
入試担当	佐久間淳一
教育担当	戸田山和久
施設整備担当	谷口 元
労働安全担当	村田 静昭
研究・教育支援担当	中村 新男
人権（苦情処理）担当	丸山絵美子
男女共同参画担当	東村 博子
人権担当	福澤 直樹

部局長等

本部		
事務局	事務局長	高橋 誠
総務部	総務部長	堀内 敦
	総務課長	亀原 正美
	基金推進主幹	三輪 康
	人事課長	宮川 勉
	職員課長（兼務）	宮川 勉
	人事主幹	樋田 浩和
財務部	財務部長	西川 泉
	財務課長	廣岡 信行
	財務調整主幹	河合 泰和
	経理・資産管理課長	後藤 隆文
	契約課長	加藤 博文
研究協力部	研究協力部長	横山 正樹
	研究支援課長	中塚 淳子
	社会連携課長	富田 博明
国際部	国際部長	勝平 宏
	国際企画課長	堀尾 多香
	国際連携主幹	合田由美子
	国際連携主幹（AO 担当）	森田 洋子
	国際学生交流課長	出口 秀典
施設管理部	施設管理部長	奥村 滋夫
	施設企画課長	虹釜 幸広
	施設整備課長	吉村 元晴
	施設管理課長	河地 龍三
	環境安全支援課長	林 清
学務部	学務部長	安田 修
	学務企画課長	丸岡 充
	教養教育院事務主幹	高下 一磨
	学生総合支援課長	社本 庄司
	入試課長	吉見日出明

人事労務担当	市橋 克哉
財務担当	寺崎 浩子
鶴舞地区担当、評価担当	植村 和正
研究推進担当	松岡 信
国際化拠点整備担当	遠藤斗志也
国際交流担当	宇田川幸則
評価担当	木俣 元一
総長調査戦略担当	大屋 雄裕
総長調査戦略担当	根本 二郎
総長調査戦略担当	杉山 直
総長調査戦略担当	長谷川好規
総長調査戦略担当	藤巻 朗
総長調査戦略担当	肘井 直樹

運営支援組織		
産学官連携推進本部長	宮田 隆司	
国際交流協力推進本部長	渡辺 芳人	
情報連携統括本部長	山本 一良	
情報推進部長	櫻井 清隆	
情報推進課長	浦部 和久	
情報基盤課長	瀬川 午直	
環境安全衛生推進本部長	藤井 良一	
施設計画推進室長	谷口 元	
核燃料管理施設長	井口 哲夫	
評価企画室長	松下 裕秀	
ハラスメント相談センター長	石黒 洋	
社会連携推進室長	家森 信善	
災害対策室長	鈴木 康弘	
男女共同参画室長	東村 博子	
法務室長	本間 靖規	
広報室長	佐分 晴夫	
リスク管理室長	佐分 晴夫	
総合企画室長	松下 裕秀	
総合企画室主幹（創薬担当）	大矢 淳一	
総合企画室主幹	宮崎 洋介	
研究推進室長	松岡 信	
監査室	監査室長	佐分 晴夫
	監査室主幹	斉藤 肇
教養教育院	教養教育院長	山本 一良
高等研究院	高等研究院長	近藤 孝男
文学研究科・文学部	文学研究科長・文学部長	羽賀 祥二
	附属日本近現代文化研究センター長	齋藤 文俊
教育発達科学研究科・教育学部	教育発達科学研究科長・教育学部長	早川 操
	附属中学校長	大谷 尚
	附属高等学校長	大谷 尚

法学研究科・法学部	法学研究科長・法学部長	鮎京 正訓
	附属法情報研究センター長	松浦 好治
経済学研究科・経済学部	経済学研究科長・経済学部長	多和田 眞
	附属国際経済政策研究センター長	金井 雄一
文系事務部	事務部長	土井 悟
	総務課長	野村 重信
	経理課長	齋藤 勝行
	教務課長	内出 裕之
情報文化学部	情報文化学部長	川口 潤
	情報文化学部・情報科学研究科事務長	杉浦 克博
理学研究科・理学部	理学研究科長・理学部長	國枝 秀世
	附属臨海実験所長	澤田 均
	附属南半球宇宙観測研究センター長	福井 康雄
	附属構造生物学研究センター長	前田雄一郎
	附属タウ・レプトン物理研究センター長	國枝 秀世
	理学部・理学研究科・多元数理科学研究科事務長	河本 達吾
医学系研究科・医学部	医学系研究科長・医学部長	祖父江 元
	附属医学教育研究支援センター長	高橋 雅英
	附属神経疾患・腫瘍分子医学研究センター長	高橋 雅英
	医学部附属病院長	松尾 清一
	医学部・医学系研究科事務部長	青山 正晴
	総務課長	川村 篤
	人事労務主幹	桜井 雅憲
	学務課長	西尾 直人
	経営企画課長	永家 清考
	経理課長	杉浦 良幸
	施設管理主幹	祖父江信和
	医事課長	仲井 精一
	医療サービス課長	中西 達公
	大幸地区事務統括課長	山下 啓二
工学研究科・工学部	工学研究科長・工学部長	鈴置 保雄
	附属プラズマナノ工学研究センター長	堀 勝
	附属材料バックキャストテクノロジー研究センター長	河本 邦仁
	附属計算科学連携教育研究センター長	美宅 成樹
	附属複合材工学研究センター長	上田 哲彦
	附属マイクロ・ナノメカトロニクス研究センター長	福田 敏男
	工学部・工学研究科事務部長	藤井 昭彦
	総務課長	山内 公文
	社会連携主幹	山川 明美
	経理課長	引字 勝美
生命農学研究科・農学部	生命農学研究科長・農学部長	服部 重昭
	附属フィールド科学教育研究センター長	柳沼 利信
	附属鳥類バイオサイエンス研究センター長	松田 洋一
	農学部・生命農学研究科事務長	虎澤 千恵
総合保健体育科学センター	総合保健体育科学センター長	池上 康男

素粒子宇宙起源研究機構	素粒子宇宙起源研究機構長	益川 敏英
国際開発研究科	国際開発研究科長	成田 克史
多元数理科学研究科	多元数理科学研究科長	木村 芳文
国際言語文化研究科	国際言語文化研究科長	前野みち子
環境学研究科	環境学研究科長	溝口 常俊
	附属地震火山・防災研究センター長	山岡 耕春
	附属交通・都市国際研究センター長	林 良嗣
	環境学研究科・地球水循環研究センター事務長	長尾 義則
情報科学研究科	情報科学研究科長	大西 昇
	附属組込みシステム研究センター長	高田 広章
環境医学研究所	環境医学研究所長	村田 善晴
	附属近未来環境シミュレーションセンター長	澤田 誠
太陽地球環境研究所	太陽地球環境研究所長	松見 豊
	附属ジオスペース研究センター長	荻野 瀧樹
エコトピア科学研究所	エコトピア科学研究所長	高井 治
	附属アジア資源循環研究センター長	長谷川達也
研究所事務部	事務部長	谷口 哲也
	総務課長	松岡真一郎
	経理課長	武田 実
附属図書館	附属図書館長	松浦 好治
	医学部分館長	大磯ユタカ
	研究開発室長	松浦 好治
	附属図書館事務部長	加藤 信哉
	情報管理課長	高木 昭
	情報サービス課長	岡部 幸祐
	情報システム課長（事務取扱）	加藤 信哉
全国共同利用施設	地球水循環研究センター長	中村 健治
	情報基盤センター長	阿草 清滋
学内共同教育研究施設等	アイソトープ総合センター長	本間 道夫
	遺伝子実験施設長	石浦 正寛
	留学生センター長	町田 健
	物質科学国際研究センター長	巽 和行
	高等教育研究センター長	木俣 元一
	農学国際教育協力研究センター長	山内 章
	年代測定総合研究センター長	中村 俊夫
	博物館長	吉田 英一
	発達心理精神科学教育研究センター長	松本真理子
	法政国際教育協力研究センター長	市橋 克哉
全学技術センター	生物機能開発利用研究センター長	川北 一人
	シンクロトロン光研究センター長	竹田 美和
	基礎理論研究センター長	棚橋 誠治
	現象解析研究センター長	飯嶋 徹
	大学文書資料室長	池内 敏
	学生相談総合センター長	杉山 寛行
	全学技術センター長	藤井 良一

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成23年3月16日～4月15日]

記事	月日	新聞等名
1 現代日本誤百科 (402)：「時代は進化する」町田 健文学研究科教授	3.16 (水)	中日 (朝刊)
2 山澤弘実工学研究科教授は福島第一原子力発電所の15日の爆発事故について「現状の風の流れでは、放射性物質が中部地方に到達する可能性は低い」と話す	3.16 (水)	中日 (朝刊)
3 山本章夫工学研究科教授は福島第一原子力発電所の15日の爆発事故について「東海地方に直接影響することはない」と話す	3.16 (水)	読売
4 玉置真悟さん本学学生は名古屋市議員として初登庁し前議長から厳しい挨拶を受ける	3.16 (水)	中日 (朝刊)
5 井口哲夫工学研究科教授は福島第一原子力発電所の事故に関する放射性物質への対策を解説する	3.16 (水)	毎日 (夕刊)
6 濱口総長は愛知学長懇話会に出席する	3.17 (木)	読売
7 愛知学長懇話会に出席した佐分理事は「卒業式や入学式は粛々と挙行していく」と話す	3.17 (木)	読売
8 山本章夫工学研究科教授は福島第一原子力発電所の事故について「写真では激しく壊れているように見えるが、格納容器はそんなに損傷していない」と話す	3.17 (木)	中日 (朝刊)
9 山澤弘実工学研究科教授は福島第一原子力発電所で事故後作業を続ける現場作業員について「この水準を超えてくると一過性の白血球の減少やさまざまな急性症状が出る可能性がある」と述べる	3.17 (木)	中日 (朝刊)
10 現代日本誤百科 (403)：「判明は今夜になる」町田 健文学研究科教授	3.17 (木)	中日 (朝刊)
11 第12回理工系学生科学技術論文コンクール：下田裕平さん本学学生が特別賞を受賞	3.17 (木)	日刊工業
12 講演会「日の丸・君が代強制と良心的不服従」開催：4月3日 安川寿之輔本学名誉教授が講演	3.17 (木)	中日 (朝刊)
13 平野真一前本学総長は第8回 JST サロン東海講演会で「ものづくりは理系のものだという時代ではない。文系、社会系との連携が重要だ」と語る	3.17 (木)	日刊工業
14 濱口総長が座長を務める就職問題懇話会は日本経済団体連合会が策定した採用活動の「倫理憲章」に対し「要請書」を作成する	3.18 (金)	日刊工業
15 濱口総長は「東日本巨大地震で被災した学生が就職活動で不利益を被ることがないよう企業には特段の配慮をして欲しい」と話す	3.18 (金)	日経 (朝刊)
16 国立大学協会が全国の国立大学が自校用に保管する災害救援物資の提供を呼びかけ、本学は取りまとめを担う代表校の1つとなる	3.18 (金)	日刊工業
17 家森信善経済学研究科教授は円の急騰に打撃を受ける東海経済について「値段が高くても外国が買ってくれる製品を作らなければ、生き残れない」と話す	3.18 (金)	読売
18 紙つづて：英語と研究 森 郁恵理学研究科教授	3.18 (金)	中日 (夕刊)
19 本学で第1回「赤崎賞」表彰式が行われる	3.19 (土)	中日 (朝刊)
20 中嶋哲彦教育発達科学研究科教授は教育学が子どもの貧困問題にどう取り組んできたか解説する	3.19 (土)	中日 (朝刊)
21 福島第一原子力発電所事故からの避難で本学留学生の帰国者が目立つようになる	3.19 (土)	朝日 (朝刊)
22 文化審議会が豊田講堂などの有形文化財登録を文部科学大臣に答申する	3.19 (土)	読売 他2社
	3.28 (月)	朝日 (朝刊)
23 益川敏英本学特別教授は「こころの一作」として「鉄腕アトム」を挙げる	3.20 (日)	中日 (朝刊)
24 田中 剛本学名誉教授は放射性物質セシウムの農作物への影響について「今後さらに原発から放出される量が増えなければ影響は少ない」と話す	3.20 (日)	中日 (朝刊)
25 朝日カルチャーセンター新講座：「文学に残る名僧～史実とフィクションの狭間にある真実I」阿部泰郎文学研究科教授	3.20 (日)	朝日 (朝刊)
26 佐々木美和医学部附属病院チャイルド・ライフ・スペシャリストの勤めで医学部附属病院に入院中の中学生がライブを開く	3.20 (日)	朝日 (朝刊)
27 本学は濱口総長を本部長とする「名古屋大学東北地方太平洋沖地震災害対策本部」を設置する	3.21 (月)	日刊工業
28 現代日本誤百科 (404)：日本の「運命に貢献する」町田 健文学研究科教授	3.21 (月)	中日 (朝刊)
29 減災連携研究センターは全国の大学に先駆けて「大震災情報集約拠点」を設置する	3.22 (火)	中日 (朝刊)
30 現代日本誤百科 (405)：「昨日から比べると暖かい」町田 健文学研究科教授	3.22 (火)	中日 (朝刊)
31 葛谷雅文医学系研究科教授は避難所暮らしでの便秘対策について解説する	3.22 (火)	朝日 (朝刊)
32 現代日本誤百科 (406)：「停電または電圧変動する」町田 健文学研究科教授	3.23 (水)	中日 (朝刊)
33 山澤弘実工学研究科教授は福島第一原子力発電所の事故についての対応策を述べる	3.23 (水)	中日 (朝刊)
34 環境学研究科附属地震火山・防災研究センター 東北地方太平洋沖地震による東海地震誘発の恐れは少ないと報告	3.23 (水)	中日 (朝刊) 毎日 (朝刊)
35 訃報：山下龍二本学名誉教授	3.23 (水)	中日 (夕刊) 朝日 (夕刊)
	3.24 (金)	読売
36 井口哲夫工学研究科教授は「大気中に含まれた放射性物質の多くはすでに東日本で雨と一緒に落ちている。中部地区への影響は今後もほとんどないだろう」と説明する	3.24 (木)	中日 (朝刊)
37 「水から生み出す未来の『力』－自分の手で、燃料電池を作ろう！」開催：26日 サイエンス・コミュニケーション推進室共催	3.24 (木)	中日 (朝刊)

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成23年3月16日～4月15日]

記事	月日	新聞等名
38 現代日本誤百科 (407):「主任は休みをいただいております」町田 健文学研究科教授	3.24 (木)	中日 (朝刊)
39 天野 浩工学研究科教授らの研究グループ エルシード株式会社と共同でLEDの出力を2倍以上に向上させる製造技術を開発	3.25 (金)	日刊工業
40 レーザー:濱口総長は企業の採用活動に対して「被災地の学生などに対する配慮は明確にしてほしい」と述べる	3.25 (金)	日刊工業
41 鈴木康弘環境学研究科教授は東京電力の原子力発電所に関する安全審査について「大きな津波の問題を先送りせずに評価すべきだった」と話す	3.25 (金)	朝日 (朝刊)
42 鈴木康弘環境学研究科教授は災害時における学校での避難について「マニュアルに縛られず、臨機応変に対応することだ」と話す	3.25 (金)	読売
43 山岡耕春環境学研究科教授は「東北地方太平洋沖地震の影響により福島県や茨城県で普通は起きないタイプの地震が起こった」と話す	3.25 (金)	朝日 (朝刊)
44 第6回高等研究院レクチャー「環境学という学問を創る」開催:29日 中塚 武環境学研究科教授などが講演	3.25 (金)	毎日 (朝刊)
45 東北地方太平洋沖地震の被災者支援活動に派遣された医学部附属病院医療支援チームが現地の活動報告を行う	3.25 (金) 3.28 (月)	読売 中日 (朝刊) 朝日 (朝刊)
46 東北地方太平洋沖地震を考慮し例年より簡素に本学卒業式が行われる	3.25 (金)	朝日 (夕刊) 中日 (夕刊)
47 紙つぶて:コミュニティー 森 郁恵理学研究科教授	3.25 (金)	中日 (夕刊)
48 福島第一原子力発電所の状況を学ぶ緊急学習会開催:沢田昭二本学名誉教授らが講演	3.25 (金)	中日 (夕刊)
49 講演会「日の丸・君が代強制と良心的不服従」開催:4月3日 安川寿之輔本学名誉教授が講演	3.26 (土)	朝日 (朝刊)
50 書評:「心はプログラムできるか」有田隆也情報科学研究科教授著	3.26 (土)	朝日 (朝刊)
51 福和伸夫環境学研究科教授は東海地方が東北地方太平洋沖地震から学ぶべき教訓について語る	3.26 (土)	読売
52 大震災追悼 減災連携研究センターシンポジウム「大震災、これから何をすべきか」開催:26日	3.27 (日)	朝日 (朝刊) 他3社
53 本学の「お宝」としてスペースシャトルの中で実験に使われた全周体位傾斜装置が挙げられる	3.28 (月)	朝日 (朝刊)
54 第9回坂田・早川記念レクチャー記念講演会「CP 対称性の破れの研究の進展」開催:4月16日 小林 誠本学特別教授が講演	3.28 (月)	中日 (朝刊)
55 現代日本誤百科 (408):「一目散で近づく」町田 健文学研究科教授	3.28 (月)	中日 (朝刊)
56 日比野高士環境学研究科教授が永井科学技術財団賞学術賞を受賞、小川 光経済学研究科教授が同奨励賞を受賞	3.28 (月) 3.30 (水)	日刊工業 中日 (朝刊)
57 濱口総長は今年度の卒業式挙行への思いを語り、「卒業式に加え、社会人になっての初任給などの機会に、若い人に募金を考えてもらえれば」と話す	3.29 (火)	日刊工業
58 家森信善経済学研究科教授は厳しい中部経済の状況を打破する策について語る	3.29 (火)	日経 (朝刊)
59 被災地に派遣された田中 聡医学部附属病院助教は現地での精神医療の危機について語る	3.29 (火)	朝日 (朝刊)
60 原田綾乃さん本学大学院生、岡本美紀さん本学学生は中日新聞「学生之新聞」学生スタッフ卒業の言葉を述べる	3.29 (火)	中日 (朝刊)
61 第99回日本泌尿器学会総会市民公開講座「若者に伝えたい科学の心」開催:4月23日 益川敏英本学特別教授が講演	3.30 (水)	読売
62 現代日本誤百科 (409):「匿名希望でお願い」町田 健文学研究科教授	3.30 (水)	中日 (朝刊)
63 東北地方太平洋沖地震について福和伸夫環境学研究科教授は「すべてが想定外」と話し、鈴木康弘同教授は「科学の限界を感じた」と話す	3.30 (水)	中日 (夕刊)
64 就職活動中だったある本学学生は「震災後は手帳の記入欄が空白だらけになった」と話し、学務部の就職支援担当者は「採用を先延ばしにする企業と、地元を中心に例年通りの日程の企業があり注意が必要」と話す	3.30 (水)	朝日 (夕刊)
65 現代日本誤百科 (410):「わずかも理解できない」町田 健文学研究科教授	3.31 (木)	中日 (朝刊)
66 医学部附属病院が糖尿病治療に実力のある病院の一つとして挙げられる	3.31 (木)	日経 (夕刊)
67 本学からの義援金を愛知県知事が受領する	4. 1 (金)	中日 (朝刊)
68 山澤弘実工学研究科教授は福島県飯館村の土壌が周囲より高い濃度で放射能に汚染された理由を解説する	4. 1 (金)	中日 (朝刊)
69 隈本邦彦減災連携研究センター非常勤講師は「実は地震発生後に報道ができることは少ない。発生前にいかに報道するかが重要」と話す	4. 1 (金)	中日 (朝刊)
70 附属図書館は17日より被災地域の学生らを対象に本の貸し出し基準を緩和する	4. 1 (金)	朝日 (朝刊)
71 本学大学院の留学生たちが義援金を読売光と愛の事業団に寄託する	4. 1 (金)	読売
72 本学などの学生たちが廃棄される食材を使ったチャリティーカフェを1ヵ月限定で名古屋市内に開き、収益を東日本大震災の被災者支援に充てる	4. 1 (金) 4.15 (金)	中日 (朝刊) 朝日 (朝刊)
73 古川路明本学名誉教授は「放射性物質が水に混じって海に流れ込む分はいくら薄めても量が多い」と指摘する	4. 2 (土)	中日 (朝刊)
74 本学は3月に設置した「大震災情報集約拠点」で来日した留学生向けに震災の正確な情報を提供する	4. 2 (土)	中日 (夕刊)
75 益川敏英本学特別教授は素粒子宇宙起源研究機構が導入したスーパーコンピューターについて語る	4. 4 (月)	中日 (朝刊)
76 第28回全日本空手道連盟と道会愛空塾空手道競技大会:河合君美さん教育学部附属高等学校生 (女子の部 優勝)	4. 4 (月)	中日 (朝刊)
77 現代日本誤百科 (411):「滅び行く様を変える」町田 健文学研究科教授	4. 4 (月)	中日 (朝刊)

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成23年3月16日～4月15日]

記事	月日	新聞等名
78 小林 誠本学特別教授、益川敏英同特別教授のノーベル賞受賞に貢献した高エネルギー加速器研究機構の大型加速器が東日本大震災で破損する	4. 4 (月)	朝日 (夕刊)
79 現代日本誤百科 (412) : 「バリアフリーに対応」していない 町田 健文学研究科教授	4. 5 (火)	中日 (朝刊)
80 中日本高速道路株式会社が工学研究科にインフラ技術をテーマとした寄附講座を開設する	4. 5 (火)	日経 (朝刊)
81 生源寺眞一生命農学研究科教授は東日本大震災をきっかけに農業のあり方を考え直すよう呼びかける	4. 5 (火)	読売
82 医学部附属病院と連携し中津川市が「中津川市地域総合医療センター」を開設する	4. 5 (火)	中日 (朝刊) 岐阜版
	4.10 (日)	中日 (朝刊)
83 東日本大震災を考慮し例年より簡素に本学の入学式が行われる	4. 5 (火)	中日 (夕刊) 朝日 (夕刊)
84 現代日本誤百科 (413) : 「築年数が古い」町田 健文学研究科教授	4. 6 (水)	中日 (朝刊)
85 博物館野外観察園見学会・電子顕微鏡観察会開催：16日	4. 6 (水)	中日 (朝刊)
	4.15 (金)	毎日 (朝刊)
86 「平成二十三年度 躍進する大学の学長メッセージ」：濱口総長は本学の取り組みを紹介する	4. 7 (木)	中日 (朝刊)
87 1986年に医学部附属病院に開設された「女性尿失禁外来」が国内最初の女性専門外来であったことが紹介される	4. 7 (木)	読売
88 現代日本誤百科 (414) : 「金額を詐称」する 町田 健文学研究科教授	4. 7 (木)	中日 (朝刊)
89 石原一彰工学研究科教授らが開発した高活性酸化触媒を導入し日産化学工業株式会社が製薬メーカーの臨床試験向けにサンプル提供を開始する	4. 7 (木)	化学工業日報
90 福和伸夫環境学研究科教授は500年前の明応地震で起きたといわれる15メートル級の津波について「過去にあった被害の全てに備えるのは財政的にも時間的にも難しいが、実際に起こった出来事。できる限り対策に生かしていくべきだ」と話す	4. 7 (木)	中日 (朝刊)
91 森 郁恵理学研究科教授ら 行動を決める神経回路で起こる情報のせめぎあいを発見	4. 7 (木)	中日 (朝刊)
	4.12 (火)	日刊工業
92 本学や海洋研究開発機構、東京大学、京都大学などが参加する「東海・東南海・南海地震の連動性評価」が調査研究成果をまとめる	4. 8 (金)	日経 (朝刊)
93 7日夜に宮城県で起きた震度6強の余震について山岡耕春環境学研究科教授は「本震後の余震活動が少なかった場所でも起きた。想定された宮城県沖地震の震源域に近く、今後とも注視する必要がある」と話す	4. 8 (金)	読売
94 被爆経験を持つ沢田昭二本学名誉教授は内部被ばくについて警告する	4. 8 (金)	中日 (朝刊)
95 鷲谷 威環境学研究科教授は「本震のエネルギーが大きければ余震も多くなる」と話す	4. 8 (金)	中日 (夕刊)
96 鷲谷 威環境学研究科教授や山岡耕春同教授は東日本大震災の本震は太平洋プレートと北米プレートの境界で発生したと話す	4. 8 (金)	中日 (夕刊)
97 西澤泰彦環境学研究科准教授は竣工80周年を迎えた名古屋市公会堂について解説する	4. 9 (土)	朝日 (夕刊)
98 古本宗充環境学研究科教授は東日本大震災から「連動型地震はプレート境界の様々な場所で起こりうると認識を改めた」と話す	4.10 (日)	日経 (朝刊)
99 バトミントン 東海大学選手権 女子入れ替え戦：本学は中京大学に0-3で敗れる	4.10 (日)	朝日 (朝刊)
100 本学いけばなサークルで学ぶ留学生が八代流いけばな展に作品を出展する	4.10 (日)	中日 (朝刊)
101 現代日本誤百科 (415) : 豪華な調度品は「庄巻の一言」町田 健文学研究科教授	4.12 (火)	中日 (朝刊)
102 本学の推計で東海・東南海・南海地震の「3連動地震」が起きた場合に津波の被害が想定される低地の人口が412万人に及ぶことが分かる	4.12 (火)	朝日 (朝刊)
103 鷲谷 威環境学研究科教授は11日に福島県で起きたマグニチュード7.0の余震について「この地域では、まだ余震は起きる。規模は今回が最大かもしれないが、規模が小さくなくても、直下型なので被害は大きい。気をつけてほしい」と話す	4.12 (火)	読売
104 水谷法美工学研究科教授は地盤沈下に対する最も有効な手段として街ごと高台に移すことを挙げる	4.12 (火)	中日 (朝刊)
105 本学学生のチームが「青春アカペラ甲子園」に出場する	4.12 (火)	朝日 (朝刊)
106 東海大学サッカーリーグ 2部：本学は0-0で三重大と引き分ける	4.12 (火)	中日 (朝刊)
107 東海学生陸上競技春季：鈴木亜由子さん本学学生 (女子3000メートル1位)	4.12 (火)	中日 (朝刊)
108 ナゴヤユニバーシティカップ弓道：早田直広さん本学学生 (個人男子1位)	4.12 (火)	中日 (朝刊)
109 古川路明本学名誉教授は福島第一原子力発電所の事故について「放射性物質の測定が十分ではなかった。放射線測定は積み重ねが大切。3月20日ぐらいまでもっとちゃんと測るべきだったが、そういう努力が全然なかった」と指摘する	4.12 (火)	中日 (夕刊)
110 武田 真生物機能開発利用研究センター准教授 ストレス環境条件下での細胞分裂活性の維持に必要なイネの因子を解明	4.13 (水)	中日 (朝刊) 他2社
111 現代日本誤百科 (416) : 「合格を自信にして」頑張る 町田 健文学研究科教授	4.13 (水)	中日 (朝刊)
112 川北一人生命農学研究科教授が生物機能開発利用研究センター長に選出される	4.13 (水)	中日 (朝刊)
113 平成23年度科学技術分野の文部科学大臣表彰：佐藤一雄工学研究科教授が科学技術賞・研究部門を受賞 北浦 良理学研究科准教授、関 華奈子太陽地球環境研究所准教授、西堀英治工学研究科准教授、浦口大輔同講師、野中千穂基礎理論研究センター助教が若手科学者賞を受賞	4.13 (水)	読売

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成23年3月16日～4月15日]

記事	月日	新聞等名
114 附属図書館が豪農日比家に伝わる文書群の寄贈を受け「日比家文書目録」を刊行する	4.13 (水)	岐阜新聞 (朝刊)
115 的場正美教育発達科学研究科教授が中京テレビ番組審議委員副委員長に選出される	4.13 (水)	読売
116 平成23年度第1回地球教室－親子対象フィールドセミナー「ナゴヤで化石をさがそう！」開催：5月7、8日	4.13 (水) 4.15 (金)	中日 (朝刊) 読売
117 福和伸夫環境学研究科教授が東海テレビ番組審議会の委員に選出される	4.13 (水)	中日 (夕刊)
118 本学など愛知県内11大学は東日本大震災で被災した学生に研究環境を提供するなど受け入れ支援を行う	4.13 (水) 4.14 (木)	日経 (夕刊) 読売 朝日 (朝刊)
119 井口哲夫工学研究科教授は放射性物質による汚染について「基準内で流通する食品を食べる限り、健康に影響はない」と話す	4.14 (木)	中日 (朝刊)
120 古本宗充環境学研究科教授は東日本大震災について「マグニチュード7級の地震が単純に連動したという考えでは説明できない」と話す	4.14 (木)	朝日 (朝刊)
121 名古屋市博物館記念講演会「オルメカからマヤへ」開催：24日 伊藤伸幸文学研究科助教が講演	4.14 (木)	中日 (朝刊)
122 本学はトムソン・ロイターによる論文引用数ランキングで国内総合7位となる	4.14 (木)	日刊工業 日経 (朝刊)
123 日刊工業新聞主催第7回キャンパスベンチャーグランプリ全国大会：糸田一樹さん、田中洋輔さん、池田明加さん 本学学生が審査委員会特別賞を受賞	4.14 (木)	日刊工業
124 現代日本訳百科 (417)：「注目が集まる」大会 町田 健文学研究科教授	4.14 (木)	中日 (朝刊)
125 福和伸夫環境学研究科教授は東日本大震災の衝撃について語り、便利さの土台の見直しを訴える	4.14 (木)	朝日 (夕刊)
126 中日文化センター講座：「地球環境の変化と保全」西村浩一環境学研究科教授	4.14 (木)	中日 (夕刊)
127 伊藤武男環境学研究科助教らの研究グループ アセノスフェアの密度構造を推定する手法を世界で初めて開発	4.15 (金)	中日 (朝刊) 他3社
128 本学は炭素繊維強化プラスチックの研究拠点「ナショナルコンポジットセンター (仮称)」を2012年度をめどに設置する	4.15 (金)	日刊工業
129 山岡耕春環境学研究科教授は地震について「科学は着実に進んでいる。今回は間に合わなかったが、経験は次に生かす」と語る	4.15 (金)	朝日 (朝刊)
130 佐々井崇博環境学研究科助教らの研究グループ 日本域の自然生態系における炭素収量を1キロメートル解像度で解析	4.15 (金)	中日 (夕刊)
131 紙つぶて：MOVA 森 郁恵理学研究科教授	4.15 (金)	中日 (夕刊)

第52回名大祭を6月2日(木)～5日(日)に開催

第52回名大祭が、6月2日(木)～5日(日)に東山キャンパスで行われます。

今年のテーマは「常笑気流!!」です。このテーマには、「名大祭に関わるすべての人に笑顔が多く広がり、そして名大祭をさらに発展をさせる」という想いがこめられています。

多種多様な企画をご用意しておりますので、皆様お誘いあわせの上、ご来場ください。

第52回名大祭 すべての人が笑顔で楽しめる第52回名大祭へ…

「常笑気流!!」

開催日程：6月2日(木)～5日(日)

会場：名古屋大学東山キャンパス

最寄駅：地下鉄名城線名古屋大学駅下車（お越しの際は公共交通機関をご利用ください。）

●テーマ企画

「私たちがいつも笑顔であるために

～来たる東海地震にそなえて～

第52回名大祭では、テーマの想いを体現させた講演会を6月5日(日)13時からシンポジオンホールで行います。今、東日本大震災の発生によって、日本中に災害関連の不安が広がっています。そして、私たちが住んでいる東海地方でも、発生が予測されている東海地震に対する不安が広がりつつあります。しかし、それは正しい情報に基づいたものなのでしょうか。この企画は、正しい知識・情報を得て頂くことで、少しでも不安を解消し、笑顔を広げたいという想いから生まれました。講師に、この分野の専門である本学の山岡耕春環境学研究科附属地震火山・防災研究センター長をお迎えし、私たちが知るべき防災知識を中心にお話して頂きます。私たちの笑顔を守るため、正確な防災知識を身につけませんか？

●学術系企画

今年は、6月4日(土)に濱口道成本学総長、東海テレビアナウンサーの高井一氏を講師にお迎えし、講演会「スゴイ日本人になるためには」を行います。5日(日)には第3グリーンベルトで、「回転」をテーマとした体験・工作・展示を一度に楽しんでいただける「KURUKURU 広場」を行います。

また、研究公開企画としてツアーやセミナーといった多彩な方法で多くの研究室の紹介を行います。研究機関として日本で高いレベルを誇る名古屋大学ですが、その研究内容を知る機会

第52回名大祭における食品の取扱いについて

第51回名大祭の模擬店衛生管理体制の見直し・改善・強化を行った上、昨年度同様の店舗数を維持し、より充実した出店者に対する衛生説明会をあわせて実施することで、さらなる万全な模擬店運営システムの確立に名大祭本部実行委員会一同努めております。

皆様に安心して名大祭を楽しんでいただけるよう、千種保健所のご指導の下、模擬店運営を行ってまいりますので、ご理解のほどよろしくお願いいたします。



はそう多くありません。広く一般に名古屋大学の研究を知ってもらうとともに、研究者の方と一般の方が直接触れ合う場を提供しようという企画です。是非一度足を運んでみてください。

学術系企画は、一部事前予約制になっております。公式 HP「meidaisai.com」をご参照ください。

●環境への取り組み

名大祭の模擬店では、環境に配慮した間伐材割り箸を使用しています。さらに、ペットボトルキャップを回収し、ワクチンに換えて途上国に送るボランティア活動にも参加しています。皆様もご協力お願いします。

●バリアフリーへの取り組み

名大祭では、障がい者、高齢者、妊婦、子ども、子ども連れ、外国人の方も含めたすべての来場者に名大祭を楽しんでもらうために様々な取り組みを実施しています。出来るだけ多くの企画にバリアフリー化にご協力をしていただいたり、障がい者が安心して名大祭を楽しんでもらえるような企画をしたりしています。また、名大祭期間中の構内のバリアフリー情報をまとめた「バリアフリーパンフレット」を作成しています。公式 HP「meidaisai.com」にも詳細を載せていますので是非ご覧ください。

問い合わせ

名大祭本部実行委員会

TEL/FAX：052-789-5178

E-mail: mail@meidaisai.com

URL：http://meidaisai.com

開催月日・場所・問い合わせ先等

内容

4月18日(月)～5月27日(金)
 場 所：博物館野外観察園
 セミナーハウス2階
 時 間：10:00～16:00
 休 館 日：土・日曜日、祝日
 入 場 料：無料

サテライト展示 (セミナーハウス展示)
「三矢保永写真展－空 雲 光－」
 内 容：光と雲と山の彩りを主な撮影対象とした写真を展示



[問い合わせ先]
 博物館事務室 052-789-5767

4月26日(火)～8月31日(水)
 場 所：博物館2階展示室
 時 間：10:00～16:00
 休 館 日：日・月曜日
 入 場 料：無料

第15回博物館特別展
「深海の生物と古生物
－知多の化石から生きているウミユリまで」
 [特別講演会 (博物館友の会主催)]



6月4日(土)
 場 所：博物館3階講義室
 時 間：13:30～15:00
 講演題目：「海岸から深海まで…ときどき空も飛ぶ?!
 なんとも多様なフジツボの世界」
 講 演 者：倉谷うらら氏 (サイエンスライター)
 入 場 料：無料

[問い合わせ先]
 博物館事務室 052-789-5767

5月13日(金)～6月9日(木)
 場 所：中央図書館4階展示室
 時 間：9:00～17:00
 参 加 費：無料

附属図書館2011年春季展
「古筆切をたのしむ」
 テ ー マ：「南北朝の人びと」



[問い合わせ先]
 附属図書館
 事務部情報管理課庶務掛 052-789-3667

5月15日(日)～5月21日(土)
 場 所：チュラロンコン大学 (タイ)

第4回 AC21学生世界フォーラム
 テ ー マ：「持続可能な農村開発」

[問い合わせ先]
 AC21推進室 052-789-5684

5月18日(水)
 場 所：環境総合館1階レクチャーホール
 時 間：18:15～19:45
 参 加 費：無料

第69回防災アカデミー
 講演題目：「地震リスクに知で備える
 －防災科研における地震災害軽減に向けた取り組み－」

[問い合わせ先]
 災害対策室 052-788-6038

**5月21日(土)、5月28日(土)、
 6月11日(土)、6月18日(土)**
 場 所：博物館3階講義室
 時 間：10:30～
 定 員：75名
 対 象：原則、シリーズ全てに
 参加できる人
 参 加 費：無料

「達人と話そう－自然を科学する－」
 講演題目：「地下環境を科学する－岩盤中の物質の移動－」(5/21)
 講 演 者：吉田英一 (博物館館長・教授)
 講演題目：「匂いと香り、その不思議な世界」(5/28)
 講 演 者：高部園彦氏 (静岡大学名誉教授)
 講演題目：「宇宙を科学する－宇宙観測の挑戦－」(6/11)
 講 演 者：若松謙一氏 (岐阜大学名誉教授)
 講演題目：「糖類を科学する－人類を支える多糖の世界－」(6/18)
 講 演 者：小林一清氏 (本学名誉教授)



[問い合わせ先]
 博物館事務室 052-789-5767

イベントカレンダー

開催月日・場所・問い合わせ先等

内容

5月28日(土)、6月11日(土)、
6月25日(土)、7月23日(土)、
8月6日(土)、8月20日(土)

場 所：インキュベーション施設1階
プレゼンテーションルーム

時 間：10:00～

[問い合わせ先]

社会貢献人材育成本部

ビジネス人材育成センター 052-747-6490

ビジネス人材育成センター 平成23年度前期 B人セミナー

テ ー マ：「ビジネス人の基本スキル」、「博士の就活スタート・リスタート」(5/28)

「技術経営(MOT)コンサルティング概要」、「プレゼンテーションスキル研修」(6/11)

「医薬品・機能性食品開発における試験内容と、それに係る業務について」、

「臨床試験における統計学の役割」(6/25)

「弁理士の業界と業務」、「再生医療の現状と今後の展望」(7/23)

「なぜ、あの人は惚れ惚れするほど、コミュニケーション上手なのか?」(8/6)

「バイオ業界の現状と求められる“人財”」、「プロフィールシート作成講座」(8/20)

5月30日(月)

場 所：農学部管理棟1階大会議室

時 間：15:30～17:00

入 場 料：無料

[問い合わせ先]

農学国際教育協力研究センター

教授 前多敬一郎 052-789-4073

2011年度農学国際教育協力研究センター オープンセミナー

講演題目：「持続可能な開発のための教育(ESD)とは何か？

—途上国の教育の可能性—

講 演 者：北村友人(農学国際教育協力研究センター客員教授)

6月15日(水)

場 所：野依記念学術交流館2階
カンファレンスホール

[問い合わせ先]

G-COE事務局 052-788-6200

第4回グローバルCOE化学 成果報告会

内 容：平成22年度の成果報告

6月18日(土)

場 所：博物館2階展示室

時 間：14:00～15:00

参 加 費：無料

[問い合わせ先]

博物館事務室 052-789-5767

博物館コンサート(NUMCo)

テ ー マ：「マヌーシュスウィングとミュゼット」

演 奏 者：山本佳史氏(ギター)、鈴木俊介氏(ギター)、

榎間淳一氏(ギター)、青木孝明氏(アコーディオン)、

モロオカケイイチ氏(ベース)



名大トピックス No.216 平成23年5月16日発行

編集・発行/名古屋大学広報室

本誌に関するご意見、ご要望、記事の掲載などは広報室にお寄せください。

名古屋市千種区不老町(〒464-8601)

TEL 052-789-2016 FAX 052-788-6272 E-mail kouho@post.jimu.nagoya-u.ac.jp

表紙

赤崎記念研究館1階展示室
(平成23年4月12日)



名大トピックスのバックナンバーは、名古屋大学のホームページ
(<http://www.nagoya-u.ac.jp/extra/topics/>)でもご覧いただけます。

109 映像資料にみる1960年代の名大 ② — 64年頃のカラー映像 —

前々回に続いて、大学文書資料室に昨年寄贈された1960年代の映像資料を紹介します。

今回は、「電気学科25年あゆみ」で、名古屋大学二葉会(工学部電気系同窓会)が企画し、1964(昭和39)年春に製作されたカラー映像です(約16分30秒、音声あり)。元々は16ミリフィルムに収録され、のちにVHSビデオテープになっていましたが、工学部電気学科のちに電子工学科教授であった内山晋名誉教授がデジタルデータに変換し、DVDとして寄贈されました。

内容は、名古屋帝国大学創立以来の電気学科の歴史ですが、前半は創立時の関係者のインタビュー形式になっています。例えば、当時存命だった初代総長の渋沢元治や、当時の総長で創立当初から電気学科の教授であった篠原卯吉のカラー映像と肉声は、少なくとも資料室が認識している限りでは唯一のもので、大変貴重だと思われます。

そして、ある意味最も注目されるのが、後半を中心に映っている1964年頃の名古屋大学の様子です。電気学科が中心ですが、東山キャンパスを中心に、それ以外の学部や施設の様子も、それぞれ短い時間ながら映っています。63～64年頃といえば、いずれも2008(平成20)年にノーベル賞を受賞した、益川敏英名古屋大学素粒子宇宙起源研究機構長は理学研究科の大学院生として、小林 誠特別教授は教養部の学生として、下村 脩特別教授は理学部の助教授として、名大に在籍していた時期です。

当時、映画ではカラー作品も増えていましたが、カラーテレビは一般家庭にほとんど普及していなかったことを考えても、この映像の貴重さが分かります。この時代に限らず、名大の歴史にかかわる映像資料をお持ちの方は、ぜひ大学文書資料室にご一報ください。



1	2	3
4	5	

- 1 インタビューに答える渋沢元治初代総長。この時、すでに90歳に近かったが、元気そうに談笑している。総長当時、夢として描いたキャンパス構想が、夢以上になったと語った。
- 2 本山方向を見た当時の四谷通。市バスが「名古屋大学前降車所」に入ろうとしている。
- 3 朝、通学する名大生たち(東山キャンパス内)。
- 4 瑞穂の教養部での実験風景。教養部は、この64年3月に東山への移転を完了した。
- 5 上空から見た本部(現在の2号館)、豊田講堂、古川図書館(現在の古川記念館)。本部は64年3月に名城から移転を完了、古川図書館は建設中で、同年11月に落成した。